

---

# 霊能少女 更科美晴シリーズ

阿僧祇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霊能少女 更科美晴シリーズ

### 【Nコード】

N9415X

### 【作者名】

阿僧祇

### 【あらすじ】

蒙木台高校には1人の霊能少女がいた。人を助けない霊能者……その理由は、この土地に伝わる伝説と関わりがあった。 / 2003年の秋、初めてホラーを書いた漫画原作の習作を、作品批評用のクローズ掲示板に載せたらなぜか好評悪評ともに殺到（笑）、リクエストに応じてシリーズ化してしまったもの。（笑） / 漫画脚本の形式です。

## 第一編「妄鬼堆（もうきたい）」（前書き）

シリーズ第一作・・・つーか、最初は読み切り想定 of 習作原作でした。

### ■ 主要人物 >

後藤哲男：主人公。転校生。

更科美晴：哲男の隣の席。無気力な美少女。

華村冴子：古文担当の教師。冷たい雰囲気も持つ美女。

老婆：哲男の一家の隣人。

第一編「妄鬼堆（もうきたい）」

「1」

□

ぐちゃっ…

暗闇の中でうごめいているモノ。

（くらくてよく見えない）

□

ぐちゃっ……ぐちゃっ……

複数。

□

ぐちゃ…ぐちゃ…ぐちゃ…

その中に見え隠れする、人間の手足。

（食われていることだけは分かる。）

□

カッ……

光。

□

光の中で冷たく微笑している少女。（美晴？）

「2」

□ 坂道の先に見える校舎。

T「妄鬼堆」

□

バス停から出ていくバス。

残ってる哲男。

後ろが崖沿いの坂道。

「3」

□

見上げて

哲男「はあ……この坂の上にあるわけね学校は」

溜息。

セミの鳴き声。

□（場面転換）教室

休み時間になるところ。

黒板に古文。

キンコーンカーンコーン……

ザワザワ……

華村「では授業を終わります」

□ 哲男、隣の席の美晴に

哲男「更科さんだっけ？ 教科書ありがとところで学校の案内してくれない？」

「4」

□

冷たく見つめる美晴。

□

カタ……

哲男「あ……」

無視して席を立ち去ってしまう美晴。

□

哲男「なんだい、いったい！」

□

廊下を一人で歩いてる哲男。

□

何かに気が付く。

哲男「華村先生」

「5」

□ 華村（古文の教科書を抱いてる）「あら後藤くん、一人？」

哲男「いやあ 隣の娘に案内頼んだんだけど振られちゃいました」  
（誤魔化し笑い）

□ 華村（意外そう）「あらあら……後藤くんてああいう娘が好みだったの」

□ 哲男（ごまかすように）「あつ いや……好みから行けば華村先生の方が……」

□ 華村「ウフフ……上手ね。前の学校でもそうやって女の子を泣かせてたんだ？」

哲男「と、とんでもない！ そんなことしませんよ……」

□ 華村（立ち去る）「まあいいわ。早くクラスにとけこんでね」

哲男「は、はい」

□ 見送る哲男  
バブルアウト

「6」

□ バブルイン  
校庭の隅、大木の影。  
小さな石の祠。

哲男「なんだろ、これ？」

□ 覗き込むように石を見てる哲男。

哲男「お墓……じゃないよな。なんで学校にこんなものが？」

□

石に触れようとする哲男。

「……触らないほうがいいわ。」

□

哲男の後ろにいた美晴。

哲男「更科さん？」

美晴「訳の分からないものにやたら触れるのは赤ん坊のすることよ」

□

カチン！（哲男）

「7」

□

哲男「触れてみなきゃわからないことだってあるだろ！？」

美晴「……………忠告はしたわ」

フキダシでつなぐ

□

立ち去る美晴

哲男「なんだい、感じ悪い」

□ 夕方

□ バス停

哲男「なんだかよそよそしい奴の多い学校だよなあ」「あの更科つて女がとくに！」

バスが来る。

「8」

□ アパート。

鍵を捜す哲男。

□

隣のドアから出てくる老婆。

老婆「あら、おとなりさん？」

□  
哲男<sup>ペコリ</sup>「あ、こんど越してきました後藤です。父は仕事行ってますけど  
どうぞよろしく」

□  
老婆「学生さんなのね、どちらに？」

哲男「蒙木台<sup>もつきだい</sup>高校です」

□  
驚く老婆。

老婆「蒙木台……蒙木台……」

□  
哲男「？」「なにか？」

「9」

□  
老婆「いえ 別に」「ただあの丘はねえ……」

□  
哲男「気になるな。教えてくれませんか、あの丘になにかあるんですか？」

□  
老婆「私は結婚してから50年 この町に住んでるんだけどね」  
「あの学校が建つたのはまだ15年くらい前だったかねえ」

□  
哲男「へえ……新しいんだ」

老婆「たけど、あの丘はねえ……」

□  
哲男「あの丘に何か？」

老婆の声「まあ ただの言い伝えなんだけどね」

「10」

□ 老婆「ずっと昔にこのあたりに人を食う鬼が出て」

「えらいお坊さんだか巫女さんだかがあの丘に封じたという昔話が伝わって

いるんだよ」

□<sup>うれしそう</sup> 哲男「へえ……」 「僕 好きなんですよそういう昔話とか伝説とかの類」

□ 哲男「もつと詳しく教えてくれませんか？」

老婆（避けるように）「さあねえ私も詳しくは知らないねえ」

□ 隣の部屋に戻って行く

老婆（後ろ姿）「市立図書館にでも行って調べたら何かわかるかねえ……」

見送る哲男。

□ 哲男「……………」

「11」

□ 市立図書館

□ 看板「市立図書館」

□ 哲男、調べもの中

哲男「げげっ、これ古文書じゃねえか……」

□ 古文書の一ページ（草書体）

哲男「『夫れ当村は…あと読めねえ（汗）』」

□ 古文書をめくる哲男

哲男「なんとか 読める字がひとつでもないかなあ……」「ん？」

「12」

□

本の文章の中に「妄鬼堆」の文字

哲男「妄鬼堆……もうきたい？」

□ 本を持ち上げて見てる哲男

哲男「当て字かなあ？ それにしてもやな文字……（汗）」

□

哲男「なんとか ここに書かれてることを読んでみたいもんだけど……」「！！」

□ バブル・イン

教員室、華村の机。

華村「え？ 郷土史料の古文書？」

「13」

□

哲男（4つ切り大の写真の束を手）「そうなんです。崩し字がどうしても

読めなくて」

華村「後藤くんてかわったものに興味あるのね、若いのに」

□

哲男「へんですか？」

□

華村「ううん。そういう子、好きよ」

□

照れて上向いてる哲男

華村（写真を見ながら）「しかもごていねいに写真までとってくるなんて」

哲男「古文書は光を当てると痛むからって、コピーもストロボ写真もなかなか」

許可されないんですけどね。今回はラッキーでした」

「14」

□

写真を熱心に見ている華村

華村「ふうん…」

哲男「何かわかりました？」

□

華村「そうね……これはこの地方独特の書体で書かれているから私も完全には……」「でも 資料があれば読めないこともないわ」

□

哲男「やったっ」

華村「そうね……一人では無理だけど二人で徹夜で調べればなんとか意味が分かると思うわ」

□

哲男（意味に気がついて赤くなる）「二人で徹夜？」

□

華村「今夜宿直なの。夜に宿直室まで来てくれる？」「あ、でも泊りは無理か……」

無理か……」

「15」

□

哲男（赤い顔）「あ、行きます 行きます！」

！

「親には先生に勉強を見てもらうって言う。ウソはついてません

□

華村、くすっ

華村（色っぽく）「そう」「じゃ、待ってるわ」

□ 廊下。

上機嫌で廊下を歩いてる哲男。

哲男「♪」

□

角でいきなりと呼び止められる

美晴「後藤」

哲男「！」

□

美晴「……………」「華村先生には近づきすぎない方がいいわよ」

「16」

□

哲男「……………」「なんで？」

□

美晴「忠告したでしょう」「訳の分からないものにやたら触れるのは  
赤ん坊のすること」

□

哲男「華村先生は訳の分からないものじゃねえだろ」

美晴「……………」

□  
ニヤニヤ

哲男「ははあ わかったぞ更科。お前 妬いてんだろ」

「華村先生と更科じゃ月とすっぽんだもんな」

□

美晴「……………」「忠告はしたわ」

向こうへ振り返る。

□

去って行く美晴。

見送る哲男。

「17」

□ 夜の校舎。

□

校庭を一人で歩いている哲男。

□

哲男「さすがに夜の学校は不気味だなあ」

□

哲男（上機嫌）「でも、美人教師と美少年（？）が夜の宿直室で二人きりっ！」

「何も起こるなって言う方が無理だよな」

□ 昇降口

哲男「えっと、宿直室、宿直室」

「18」

□ 宿直室。

電気は点いてる。

テーブルには電気ポット。

哲男の声「こんばんは華村先生」

□

哲男「……」「いないんですか？」

□

勝手に上がる哲男。

哲男「校内の見回りにでも行ってるのかな？」

□

テーブルのところに座ってポットに

哲男「お湯 湧いてるのかな？」

「19」

□

ポットに手を置く。

ベトッ…

哲男「!？」

□

哲男「なんだ、これ？」

触った手ににべたべたするもの。

□

ザワザワ……ザワザワ……

周囲に何かうごめくような気配。

□

ザワザワ……ザワザワ……

気配に気づいてびびる哲男。

「20」

□

驚愕する哲男

□

周囲を取り囲んでる、わけのわからないスライム状の物体。

□

哲男「な、なんだこれ!!」

□

じわじわと近づいてくる物体。

□

哲男「う……」

□

うわあああっ!!

絶叫して逃げ出す哲男。

「21」

□

ダダダダッ

ザワザワザワ

廊下を走る哲男。

だが、廊下にも物体があふれてくる。

□

哲男、走り続ける。

哲男「なんだ一体！」「先生！ 華村先生ーっ！！」

□

ダダダダ

廊下を疾走するイメージ。

混乱するコマ割

あふれ出てくる物体

□

□

□

□

□

カッ！

突然の閃光。目が眩む哲男。

「22」

□

階段の踊り場に立つ美晴。手にお札を持っている。

美晴「……………だから言ったのに」

哲男「さっ、更科！？」

□

ザワザワ……

動きが遠慮がちになる物体。

□

カツ！

閃光。

美晴がお札を突き出すと物体が後じさる。

□ 哲男「さ…更科！ 助けてくれ、そのお札があれば大丈夫なんだな！？」

「23」

□ 美晴「ごめんなさい」「御先祖様ほどの力には私には無いの」

□ 哲男「御先祖様？」

□ 美晴「あれがこの丘から出ないようにするだけで私には精一杯」

「それも三ヶ月に一度生け贄を与えることでやっと抑えてられるの」

□ 哲男「い、生け贄！？」

□ 美晴「あれを蘇らせたのは、こんなところに学校を建てた人たち」

「でも とつくに人柱になって貰ったわ」

□ 哲男「なんなんだよ、人柱って！！」

「24」

□ ぐちゃ… ぐちゃ…

再び動き出す物体。

□ 美晴「華村先生は後藤くんのことを気に入ったみたい」

「だから あれを抑えるためにあなたも往って」

□ 哲男「ちよつと待って！ 華村先生！？ いったいそれ どういう……」

どんっ

突き飛ばされる。

「25」

□ うわああああああ！！

悲鳴で繋ぐ。

物体の方へ階段を落ちていく哲男。

あああああ

□

悲鳴で繋ぐ

ぐちゃ……ぐちゃ……

食われていく哲男

「26」

□ 美晴「だから忠告したのに……」「訳の分からないものにやたら触れるのは

赤ん坊のすることよって」「男ってみんなこれだから」

□

ぐちゃ……ぐちゃ……

食われている哲男の体。

□

美晴（冷たい微笑）「でも 華村先生は満足したみたいね」

「27」

□

ザワザワザワ…

□

ザワザワザワ…

□

ザワザワザワ…

次第にひいていく物体。

「28」

□

美晴「さて…これでまた三ヶ月は大丈夫」

「そのうち美人が好きで生きのいい男の子がまた来るでしょう」  
振りかえって去っていく。

□

暗い夜の廊下。

遠く、美晴が去っていく。

小さく「ザワザワザワ…くちゃっ」と  
音が響く。

<終>

## 第一編「妄鬼堆（もうきたい）」（後書き）

■ か・い・せ・つ

もともとシリーズ化するつもりはなく、読みきり漫画の原作として2003年の10月ごろに書いたのが『妄鬼堆』でした。ホラーの書き方がよくわからず（今でも苦手ですが）、試行錯誤してたのが文面からもわかりますね。

ところが、この「人を助けない霊能ヒロイン」の話を「もつと読みたい」と何人にも言われて続編『河童沼』を書き、さらに「美晴の心情に踏み込んだ続編を」と言われて『祟り祠』を……というように、毎回、掲載後3日間くらいに寄せられた批評をできるだけ全部反映させて1週間後までに次回を書くという、作者がめちゃくちゃに苦しいチャレンジ習作シリーズとなったのでした。（^^；

のちに何度も書き直すことになりいろんなバージョンができましたが、今回再発表させていただくのは、最初のバージョンに少し加筆修正したものです。

なお『霊能少女 更科美晴シリーズ』を最初に書いてから5年くらい後、何人めかの作画立候補さん（プロ）の抽象的な要求や掲載予定誌のコンセプトに合わせて書き直しを繰り返すうちに、いつのまにか『Dragon D<sup>ラゴン</sup>awdle<sup>ダウドル</sup> 竜の住む森』になっていたという事実は、作者の僕にもワケワカです。まああれはあれで楽しい話じゃないかとは思っけど。（笑）

なおこの物語は、現在、『御霊ヶ丘』という題名で何度目かのリメイク途中にあります。これも習作であり、公開するかどうかは

未定です……たぶん未完に終わるでしょう。

「小説家になろう」には初回バージョンを、完結編までの正シリーズ7本と、リクエストに応じて書いた外伝シリーズ2本を載せる予定であります。（このシリーズに関するリクエストにはもう対応できません（汗））

では、漫画原作にまだ慣れてなかったころの、さらに無茶な制約で書いた完成度最低（笑）という評価まで受けた習作シリーズですけど、しばしお付き合いを給われたら嬉しっす！

## 第二編「河童沼（かっぱぬま）」（前書き）

### ■粗筋>

紀久はイジメに遭っていた。ある土曜日の夜、河童も溺れるという沼で泳がされることになるが、そこに更科美晴が現れた。

### ■人物>

水上紀久：主人公。苛められ者。

更科美晴：紀久のクラスメート。冷たい感じの美少女。

華村冴子：古文担当の教師。美女。（裏設定〓実は美晴に封じられてる妖霊）

春樹：いじめ者

達也：いじめ者

俊郎：いじめ者

ゾクA：原付で粹がつてる珍走団

ゾクB：原付で粹がつてる珍走団

## 第二編「河童沼（かつばぬま）」

### ■物語>

#### 「1」

T「河童沼」

#### 「2」

□ 沼池のほとり。

そこに無表情で立つ美晴。

水面には葦の群生にゴミが浮いている。壊れたスクーターとか瓦礫とかも

見え隠れ。

□

錆付いて曲がり痛んでる看板

「みずにはいつてはいけません

××町教員委員会」

（小さく）

河童が溺れているユーモラスな絵。

□

お札を手にした美晴、ふと物音に気がつく。

ガヤガヤ…

声「いいから来いよ！」

□ 沼池の全景。（美晴はすでにいない）

そこはかなり大きな沼。

ゴミが岸に打ち寄せている。

岸边にやって来た男子の高校生たち、春樹、達也、俊郎、紀久。

#### 「3」

□

達也「汚え貯水池。魚も住んでないんじゃないの？」

□ 俊郎「死んだ婆ちゃんが、ここ、溺れた奴が河童になったから河童沼って呼ぶんだっ

て。ま、どこにでもある話だけだな。」

不安そうな紀久。

□ 春樹「河童か！ そりゃいいや！」

□ 春樹「どうだい、河童大会やんねえか」

達也「なんだいそりゃ？」

□ 春樹ニヤリ「この沼を泳いで渡るんだよ。」

□ ゴクリ……一同、緊張。

俊郎「あ、あぶなくねえか？」

「4」

□ 春樹「なんだよ、高2にもなって河童が恐いのかオマエ？」

俊郎「そ、そんなわけじゃないけど……」

□ 不安そうな紀久。

□ 春樹「よし、土曜日の夜にやっぞ。オマエら逃げるなよ。とくに水上！」

□ 気が進まなそうに

紀久「あ……ああ。わかってるよ。」

□

わいわいと去っていく一同。

サーッ……

そよ風で波立つ水面

いつの間に来たのか、ほとりでお札を手に考えこんでいる美晴。

「5」

美晴（水面に向かって）「やめときましようか……土曜日まではねえ？」

その方がいいんじゃないかって？」  
冷たく笑う美晴。

ポチャ…

水面に小さな波紋。

□ （場面転換）学校

キンコンカンコン……

華村「ではSHRを終わります。」  
ショートホームルーム

声「起立。…礼。」

「6」

□ 帰り支度中の紀久。

美晴の声「水上新くん」

□ 紀久「更科？」

美晴「話があるんだけど、ちょっと付き合ってくれない？」

□

驚く紀久。

紀久「おれに？」

□ 春樹「なんだあ、更科？ 愛の告白かあ！」

達也「ひゅーひゅー！！」

□ 美晴「……………。そういうことしか頭にないの？」「ゲレツ下劣ね。」

□ 春樹「なんだとコラア！」

ガタン！

美晴「今は水上くんに用があるの。後にしてくれる？」

□ 冷やかな流し目で見る美晴。

□ ビビリの入る春樹。

「7」

□ 教室を出て行く美晴と紀久。

その後ろで

春樹「ちっ！」

唾を吐く。

□ （場面転換）屋上

ヒュウウウ……と風が。

□ 金網から見下ろしてる美晴の髪が風になびく。

その後ろに立つ紀久。

美晴「もうすぐ暑くなるわね」

□

□ 紀久「あの 更科、話ってなに？」

□ 美晴、振り向いて、作り物めいた明るい笑顔。

「8」

□ 美晴（笑顔）「ねえ水上くん」「あの人たちとつきあってて楽しい？」

□ 紀久、衝撃を受ける。

□ ごまかすように、

□ 紀久「そ、そりゃあ友達だし……」

□ 美晴の後ろから風。

□ 美晴「友達…ね」「はたしてそうかしら？」

□ 吹き出しで繋ぐ

紀久に背を向け金網の方に向き直ってしまう美晴。  
うしろで困惑してる紀久。

「9」

□ 美晴（後ろ姿）「あのね……我慢には二種類あるの」

□ 「意味のある我慢と意味のない我慢。」

□ 美晴（視線を横に移動させ）「意味のない我慢はするだけムダよ」

□ 紀久（ごまかすように）「我慢なんかしてないよべつに。」

美晴、また振り向く。淋しい笑顔。

美晴「……………」「そう。じゃあもう何も言わない。」

□ すれ違う美晴と紀久。

ふわっ……

美晴の髪が紀久の顔に。髪の手が漂う。

美晴「憶えとして水上くん後ろについていること。先に行つてはダメよ、

絶対に」

(10)

□ 顔を赤らめて呆然としてる紀久。

紀久を置いてさっさと行つてしまふ美晴。

□ (場面転換)

達也「お、戻つてきた」

□ 呆然とした表情で戻つてくる紀久。

春樹「更科となに話してきたんだ？」

□ 達也「水上くん あたちあなたのこと好きなの」

俊郎「ああん、ぼくたんも好き、ちゅっ ちゅっ てか!？」

ガハハハハハ!

□ 紀久(心の声)「…下劣。」

□ 春樹「なんだよオマエ」

紀久「あ、いや……………たいした話じゃなかったよ」

「11」

□ 達也「俺たちに隠し事か？ テメエ、そういう奴だったのかよ！？」

紀久「ち、ちがうよ……」

□ 紀久（汗）「だいたい、更科みたいな性格ブスとそんな話になるわけ  
ないじゃないか」

春樹「まあ、そりゃそうだな」

□ ふと目をやる紀久。

□ 愕然とする紀久。

□ 扉の影で冷ややかに見ている美晴。

「12」

□ 他の三人は後ろを向いて談笑してるため気がつかない。  
背を向け去って行く美晴。  
（バブルアウト）

□ ポチャン……

水面に立つ波紋。

□ 夜の闇の中、河童沼湖畔に立つ4人。

□ 春樹、懐中電灯を手に

春樹「向こう岸に行きたいか！？」

3人（いまいち気が進むまない）「おお……」

「13」

□ 春樹（紀久の後ろの襟を掴み）「よし、水上。オマエ一番手だ。」

紀久「え？　なんで…」

□ 春樹「俺達が入る前に安全を確かめなきゃならないだろ」

「男なら根性見せてみる、ホラ！　ホラ！」

□ 紀久（捕まれてて）「わ　わかったよ自分で入るから放してくれよ…」

□ 紀久、上着を脱ぎ始める

□ ハッ！

上着を脱いでるうちに気がつく紀久。美晴の顔が浮かぶ  
美晴の声「後ろについていること。先に行ってはダメよ、絶対に」

□ 振り向く紀久

紀久「あ、あのさ…」

彼をとりかこむ3人の影。

「14」

□ ドン！

紀久「あっ！？」

シャツを着たまま紀久は突き落とされる。

□ ボシャー…ン！

頭から沼へ落ちる紀久。

□

達也「どうだ水上？ 深さは？ 水温は？」  
春樹「へっへっへ…」

□  
バシャッ！

紀久「だ、大丈夫…… ちょっと冷たいけど泳げないことはないよ」

□  
春樹「よし、そのまま向こう岸まで行け」

□  
紀久「え……」

春樹の声「安全を確認するんだよ、早く行ってこい。 テメ工男だろ  
！！」

「15」

□  
紀久「わ、わかったよ…」

泳ぎ始める紀久。

□  
達也「ほんとうに行っちゃまいやがんの」  
俊郎「バカじゃねえのあいつ」

と、エンジン音が……

ブロロロ……

一同「！？」

□  
ブバン ブババババ！

ゾクA「ひゃっほーうー！！」

ゾクB「ファルルルルルルッ！」

暗闇に交錯する原付のライト

「16」

□

春樹「やべえのが来やがった行こつぜ」

俊郎「水上はどうすんだよ」

□  
春樹「ほつときやいいよあんなやつ」

去つて行く三人。

俊郎はちよつと気になつてゐる様子。

□  
ゾクA「いやゝ、危なかつた」「オマワリ撒けたななんとか」

ゾクB「ん？ 沼になんかいねえ？」

□  
ばしゃっ…

泳ぎながらゾクから隠れようとする紀久。

□  
ゾクA「ま、まさか河童！？」

ゾクB「なにっ！？」

「17」

□  
ブバババババハ！

水面に向けられるヘッドライト。紀久の影が浮かび上がる。

□  
ゾクA「人間じゃねえか、おどかしやがつて」

ゾクB（石を投げる）「ふざけんじゃねえ！」

□  
ガッ！

紀久「！！」

石が頭に当たる。飛ぶ血。

□  
岸から次々と石を投げる二人。

ゾクA「こんな時間にこんなところで泳いでんじゃねえよ！」

ゾクB「ケーサツ呼ぶぞ、ケーサツ!!」

ヒュッ

ポチャッ!

ヒュッ!

ポチャッ!

慌てて逃げようと泳ぐ紀久。

「18」

□

葦の茂る岸に上がってへたばってる紀久。

頭から血を流してる。

紀久「はあ はあ はあ……」

ブロロロロ……

二人が去っていく音。

□

ファサ……

紀久「!?!」

突然、頭にかぶさるタオル。

□

そこに美晴が立っていた。

紀久「更科!?!」

□

美晴「……………」「…下劣ね。」

□

背を向けてしまう美晴。

紀久「あ……」

「19」

□

なんとなくタオルの端を口に当ててる紀久。

□ 暗い水面に、二つの目のようなものが見ている。その側に浮いてる、

墨の滲んだお札。

□ ボチャツ……

その何かが潜っていく。が、岸に座り込んでる紀久は気がつかない。

□ （場面転換）学校の教室  
ガヤガヤ……

□ 春樹「水上……てめえ、逃げたろ！」

紀久「え！？」

「20」

□ 春樹「俺達が戻ったらテメエはもういなかった。友達を置いて一人で逃げやがったな！！」

紀久「ち、違うよ……」

達也「何が違うんだ、てめえ！」

□ 紀久「おれ、ちゃんと泳いで渡ったよ……」

□ 春樹「このヤロオ、見てないと思って好き勝手なこと言いやがって……」

□ （場面転換）

三人に引きずられるように歩いてる紀久。  
紀久「や やめてくれよ」

春樹「いいから来い！」

「21」

□ 河童沼湖畔。

春樹（突き飛ばす）「ホラ 泳げよ！」

紀久「あっ！」

□

春樹「一回泳いだんだから、二度目は簡単だろ？」

達也「そっだそっだ」

跪いてる紀久。

俊郎「手伝ってやろうぜ」

□

春樹「それ！」

わっせ！ わっせ！

三人に抱え上げられてる紀久。

紀久「や、やめてくれーっ！」

「22」

□

バシャーン！！ 学生服のまま水中に投げ込まれる。

□

ドッ

笑ってる3人。

達也「どうだい湯加減は」

□ 水面に顔を出してる紀久。

紀久「一昨日より冷たい… 足にも何か…」

□

水中に二つの目が光る。

□

ヒュッ

春樹（石を投げながら）「何やってんだよ、はやく泳げよ！」  
達也（何かに気がついてニヤリ）「おい」

□  
ボチャッ

飛んでくる石。

紀久「待ってくれ 何かに足を掴まれてるみたいで……！」

□  
見上げて驚愕する紀久。

「23」

□ 3人が壊れたスクーターを抱え上げてる。

□  
紀久（絶叫）「やめろおおおっ！」

□  
バシャー——ン！！ 紀久に命中するスクーター。

「24」

□  
ゲラゲラゲラゲラ

達也「はやく泳がねえから悪いんだぞー水上！」

□  
水面に広がる波紋。

□  
俊郎「…おい、浮いてこねえぞ？」

達也「やべえんじゃねえの？」

□  
春樹「し、知らねえよ。あいつが勝手に溺れたんだ。帰ろっぜ。」  
達也「あ、ああ。」

□  
静かになる河童沼。

「25」

□ 日暮れの河童沼。岸に立つ美晴。水面にはさざ波。

「みずにはいつてはいけません」の看板が折れて倒れ掛けている。

□ 美晴（溜息）「まいったなあ……もう少しで和魂<sup>にぎみたま</sup>にしてあげられたのに」「これで元の木阿弥。」「まさか水上くんが贄になっちゃうなんて」

□ 美晴「荒魂<sup>あらみたま</sup>の水神さん…水上くんの魂を鎮めるのを手伝ってあげてね……」

ビリッ……お札を破る。

□ リー……リー……リー

破れたお札が浮かぶ夜の水面に光る二組の目。

「26」

□ 春樹の部屋。（夜）  
布団を被って震えてる春樹。

□ 春樹（大汗をかいて）「俺のせいじゃねえ俺のせいじゃねえぞ……」

□ コンコン……  
窓を叩く音。

□ 春樹、窓に目を

□ コンコン・・・

春樹、窓を見て驚愕。

「27」

□ 闇の中に浮かぶ二つの顔。

はつきりとは見えないが河童のような。

□ 驚愕する春樹。

□ うわあああああ……ひひひひひひ……  
夜の町に響き渡る悲鳴。

「28」

□ 教室。

ザワザワ・・・

誰か「また行方不明が出たって?」「今度は4人もだつてよ」「この学校

呪われてんじゃねえの?」

□ 華村「はい 静かに! HRを始めます」

声「起立! 礼!」

□ 席につき横を見る美晴。

机の上の花瓶が見える。

□ 机の花瓶にそよ風が。

モノローグ「こんどは本当に友達ができたわね。同じ『水神(河童)』

の

友達が……「ね、水上千」

□

クス……

冷たく笑う美晴の口元。

< 終 >

## 第二編「河童沼（かっぱぬま）」（後書き）

2003年の10月ごろ。批評をもらって参考にする場所で、人助けをしない霊能ヒロインの出てくる習作『妄鬼堆』を載せてみたら、「更科さんの話をもっと読みたい」と言われまして、当時近所にあった貯水池の横を通ったときに思いついた勢いで、構想取材込み2日で書いた続編でした。

この時点ではまだシリーズ化するつもりはなく、思いつきで即書きしてるだけだったんですが……（笑）

のちに「小学生ならともかく高校生にもなっつていじめで水に落とされたり泳がされたりなんてリアリティない」という批評もありました。でも僕はやられたことあるんすよね……たしかに高校のときはなかったけど、中学のときにも大学のときにも。（汗）

だから田舎の高校ならありえるかなと思ったんですが……どうなんでしょう？（汗）

### 第三編「祟り祠（たたりほくら）」（前書き）

#### ■粗筋>

博昭は、不可解な少女・美晴のことが気になる。博昭の Attacks にペースを崩した美晴だったが、ある日、博昭は荒御霊の復讐を受けることに……。

#### ■人物>

更科美晴：冷たくて無気力な感じの美少女。

真里谷博昭：美晴に興味を持つ男。

華村冴子：古文担当の教師。美女。実は

美晴に封じられてる妖霊（荒御霊）。

岩神泰道：美晴の養父。

男子A：博昭の級友。太目。

男子B：博昭の級友。長髪。

男子C：博昭の級友。小柄。

### 第三編「崇り祠（たたりほくら）」

「1」

「崇り祠」

「2」

□ シャツ！

御幣が振られる。

□ 道端の小さな祠（京都の路地によくあるような）

□ 美晴、道端の祠に祝詞を上げている。  
後ろから全景

美晴（御幣を捧げ目をつぶり）「高天原に御おやすめ大神  
数多の  
神たちを

□ 集えて永遠に神つまります」「神ろぎ神ろみの命もちて  
神いざなぎの命 筑紫の日向の………」  
祝詞を唱えていなければただの女子高生なのだが……。

□ 美晴「神ながら霊ち栄えませ！」  
柏手。パン！ パン！

□ 祠の前にお供え物が。酒徳利2つ、米、塩。

「3」

□ 離れたところをガヤガヤと通りがかる

男子高校生たち4人。その中に博昭も。

博昭、美晴に気がつく。

□ 博昭「なんだ、あれ？」

男子A「ん？」「ああ 2・Eの更科じゃないか」

□ 祠の前に立ち尽くす美晴の後ろ姿。

博昭の声「なにやってんのあんなところで？」

誰かの声「変わった奴なんだよあいつ。ユーレーが見えるって噂だぜ」

「霊能少女かあ？ うっさんくせ」

□ 凝視する博昭。

誰かの声「変な奴でなけりゃルックスは悪くないんだけどな」

「なんだオマエああいう暗いのが好み？」

□ ふきだしで繋ぐ。

博昭から見た美晴の後ろ姿。

誰かの声「いや、なんつつかこう、背筋ゾクツとくるようなところがあるじゃん」

「お前は 背筋じゃなくて下の方がゾクツとしてんじゃねえの？」  
「きみ、下劣ね。」

「4」

□ 学校。  
看板「蒙木台高校」

□ 廊下を歩いてる博昭、窓の外を見てふと気がつく。

花壇の側で、下を見て立ってる美晴。

□  
博昭、窓から顔を出し

博昭「更科さん…だっけ？ 何やってんの？」

□  
美晴、ふりむき、悲しげな目で博昭を見つめ返す。

「5」

□  
窓から外へ出る博昭。

博昭「何かあんのそこ？」

美晴「死んでるの」

□  
博昭「え？」

□  
雀の死骸。虫がたかっている。

□  
博昭「うわ…ひでえ」「お墓つくってやるのか？ 手伝おうか？」

美晴「自然死は摂理…繕っても穢れは穢れ。埋葬したところでただの

自己満足だわ」

□  
博昭（驚いて）「…女の子らしくないこと言うね、更科さん」「かわいそうとか

思わないの？」

□  
美晴、横目で博昭を見て

美晴「……………」「もっとかわいそうなものがいろいろある」

「6」

□ 背を向けて去る美晴。

□ 下を見ながら

博昭「なんなんだあいつは」

□

虫がたかった雀の死骸。

□

博昭の声「けっ！」

雀の死骸を踏み潰す博昭の足。

□ （場面転換）教室。

休み時間の教室。

誰かの声「そうそう あそこの女学院の」でさ

「ぬかせ」

はっはっは

「7」

□

博昭「しかし……寄ると集まると女の話だな俺達って」

男子B「しょうがねえじゃん、年頃なんだから」

はははは……

□

考え込んでる博昭。

誰か（博昭の後ろで）「その割に 今、つきあってる相手がいなか  
ったりして」

ははは……

誰か「この年で1人の女に縛られたくねえよ」

ははは……

□

男子A「なあ、真里谷！」

博昭「え？ あ ごめん、聞いてなかった」

□ 男子Bの声「どうしたんだよおまえ、このごろ少し変だぞ？」  
博昭の声「いや なんでもねえよ、ちょっと調子悪いだけだ」  
扉の外から悲しそうな顔で覗いてる美晴。

「8」

□ 廊下。

誰かの声「そうかあ？ あやしいぞ」

ははははは……

キンコーンカーンコーン……と音が響き、

教室の外では廊下できびすをかえす制服のスカート。（美晴）

□ 教室。

華村の授業。

朗読「二星<sup>にせい</sup> 偶々<sup>たまたま</sup>逢えり……」

□ 窓から外を見て気がつく博昭。

□ グランドでは体育の授業中。ランニング  
してる中に体操着姿の美晴も。

□ 博昭（心の声）「あれで変人でなければなあ……」

□ へたばってしまってる美晴。

どどんと抜いて行くクラスメート。

博昭の心の声「あ 体力ない」  
くすっ

□ キンコーン……

「9」

□ 水で顔を洗ってる美晴。

□ 美晴の後ろから

博昭「よっ 更科さん」

気がつく美晴。

□ タオルで顔を拭く美晴

美晴「……気安く呼ばないで」

博昭「じゃあ、美晴ちゃんて呼ばうか？」

□ タオルの影で目を見開いて赤面してる美晴。

□ タタタタタ……

走り去っていく美晴

博昭（心の声）「お 脈アリ」

「10」

□ 教室で席についでる美晴。

ひょこつと顔を出す博昭。

博昭「更科さんっ」

□ 校庭、大木の側に立ってる美晴。

博昭「なにやってんの？」

□ 廊下でゴミバコを運んでる美晴

博昭「手伝おうか、美晴ちゃん？」

□ 美晴（不快そうに）「……………つきまとわないで！」

□ 博昭「怒った顔もまたいいね」

驚く美晴。

□ ぶいっとして去って行く美晴。

「11」

□ 教室

男子B「真里谷　おまえこのごろ更科をおっかけてるんだって？」

□ 男子A「なんだそれ、聞いてねえぞそんな話」

博昭「まあまあ……ちよつと興味があつてさ」

□ 男子C「まあたしかに、俺達がつきあつた女にああいうタイプはいなかつた」

けどさ」

男子A「にしてもゲテモノ」

□ 博昭「どうだ、俺が更科をオトせるかどうか賭けねえ？」

□ 男子A「乗った！」

男子B「よし俺も失敗に五百円！」

誰か「セコいなお前（汗）」

「12」

□ 町中。帰宅途中の美晴。  
うしろに博昭。

□

美晴（振り向いて冷ややかに）「ついてこないでよ」

□  
博昭（ニツコリ）「たまたま行く方向が同じなだけだよ」

□  
美晴（背を向け）「どこへ行くの？」

博昭「さあ？ 足の向くまま気の向くまま……」

□  
日暮れ。

「13」

□  
木々に囲まれた木製の鳥居がいくつか。鳥居の上に「常川稲荷」と汚れた

看板。手前には壊れかけたた狐の石像。

□  
美晴の後について鳥居をくぐる博昭。側に稲荷神の祠がある。祠には小さな狐の人形が並べられてる。

博昭「稲荷神社？」

□  
パン…パン…

稲荷祠に柏手を打ってる美晴。後ろで見ている博昭。

□  
祠を離れる美晴。

博昭「もしかして……更科ん家ってお稲荷さんの神主さん？」

□  
美晴（振り向き淋しそうな顔で）「さあ？」「使い魔のお狐さんかもね」

「14」

□

50年くらい経ってるような建物の前。

扉は曇りガラスの引き戸。

木の塀は崩れかかって、庭は草ぼうぼう。

美晴「ここが私の家。お察しの通り稻荷祠ほにうの管理人よ」

「これで満足でしょう帰ってよ」

□  
博昭「今度 遊びに来てもいい？」

□  
美晴「……………」「度を過ぎた好奇心は身を滅ぼすのよ」

□  
博昭「いや好奇心とかじゃなくて更科さんと友達に……………」

ピシャッ！

美晴、扉を閉じてしまう。

「15」

□  
溜息をついて微笑する博昭

□  
博昭「じゃあ また明日……」

振り返る直前に気がつく博昭

□  
表札に「岩神」の文字。

□  
驚いてる博昭。

□  
玄関の中。

□  
開いている小窓の外で博昭が帰っていく。  
そちらに背を向けて、下を向いて困惑している美晴。

□  
フウッ

溜息を吐く美晴の横顔。

「16」

□ 暗い部屋に正坐してる美晴。

美晴「伯父さま、ただいま帰りました」

□

布団が敷いてあるが、暗くてよく見えない。

泰道「美晴ちゃんか」「どうだ 学校の様子は？」

□

美晴（悲しそうに）「……だんだん悪くなっていきます」「学校に限らず

このあたりに荒御霊あらみたまが多すぎます」

□

美晴「せめて 先生の姿をとってる荒御霊をこの蒙木台から外へ出さない

だけで私には精一杯で……」

□

泰道「そうか……」「人の心が荒れば御霊も荒れる……しかたないのかな」

ゴホッゴホッ

バブルアウト

「17」

□ 教室。

□ 右を見てる美晴。

□ 左を見てる美晴。

□ 通りすがりの華村。

華村「どうしたの更科さん？」

美晴「華村先生……！ いえなんでも」

□

華村「まるで誰かを捜してるみたいだったけど？」

美晴（顔を赤らめ目を逸らす）「……………」

「18」

華村「ところで…………そろそろ季節が変わるわね」

美晴「…………」「贅をお求めですか。でもいなくなっても気にされない人が

今みつかりません」

華村（につこり）「うふふ…………私は別にこだわらなくてよ？　たとえば…………」

2・Bの真里谷くんなんかどうかしら」「真里谷博昭くん。」

ビクッ！！

表情がこわばる美晴。

華村「うふふ…………あなた次第よね」

去っていく華村。

拳を握って見送ってる美晴。

「19」

トイレの前を歩く美晴の足。

声「この2・3日、どうしたん？　更科は諦めたの？」

おどろく美晴。

男子トイレ。博昭と男子A、B。

博昭「へへへ 手だよ 手！ 側にいるのが当たり前になっちゃったころ、

急に離れると今度は物足りなくて淋しく感じるものなんだ」

男子B「たしかアカネや千沙ちゃんもその手でオトしたんだよねお前」

□ ははははは…

博昭「でもふられたじゃん」

男子A「何言ってるんだよ、飽きて向こうから別れるようにしむけたくせに」

「20」

□ 廊下。

博昭の声「それはそれとして今度は賭け金ごまかすなよ？」

誰かの声「わかってるよお前が更科をオトせたらちゃんと払うって」

ははははは…

立ち尽くしてる美晴の足。

□ （場面転換）雑草に囲まれたちいさな祠の前。

美晴に後ろから声を掛ける博昭。

博昭「更科さんっ 久しぶりなにやってんの？」

「21」

□ 美晴（ちらつと見るだけ）「……………」

□ 博昭「拝んでたわけ？ 更科さんってやつは宗教家？」

美晴「………… あっちへ行つてよ」

□

博昭「熱心だね。恋愛運でも祈ってたの？」

□  
去り際に

美晴「あなたたちみんな色情霊にでも憑かれてるんじゃないの？」

「……下劣ね。」

□  
フキダシで繋ぐ。

去ろうとする美晴。

博昭「ちえっ！」

ガッツ！ 博昭、祠を蹴飛ばす。

「22」

□  
無表情のまま目だけ驚愕してる美晴。

□  
倒れた祠。

□  
美晴（汗）「な……なんてこと！」

博昭「え？」

□  
美晴「自分が何をやったかわかってるの？」

□  
博昭「罰が当たるって？ 迷信だよ迷信」「こんな小さな祠に神様なんかいないえっ

て。せいぜい低級霊さ」

□  
美晴「霊に低級も高級もない！ この祠がここにあるのは……！！」

ドロドロドロドロ……

「23」

□  
ザーッ！

いきなり降り出す雨。驚く博昭と立ち尽くす美晴。  
博昭「うわっ!？」

□  
ビシャアッ！

いなづまの光に雨に濡れながら  
美晴「結界が壊れて荒御霊あらみたまが解き放たれた…もうどうしようもないわ  
贄が無ければおさまらない……」

□  
雨を避けようとしながら  
博昭「え？」

□  
バシャ……バシャ……  
去ってゆく美晴。  
呆然としてる博昭。

□（場面転換）雨の中の常川稲荷。  
ザー――  
ザー――

「24」

□  
ザー……

稲荷の祠の前で雨に濡れてる美晴の後姿。

□  
頭からぐしょ濡れの美晴。  
博昭の笑顔が浮かぶ

博昭（回想）「更科さんと友達に……」

□

沈黙している稲荷祠。雨に濡れてる小さな狐の人形。

□  
美晴「『狐は鼠を追い払って大切な穀物を守るだから稲荷神の使いとされた』……和御霊。」「でも西洋では狐は家畜を殺す害獣……悪魔　つまり荒御霊」

□  
濡れた地面に、膝をついてぺたんと座り込んで、うな垂れてる美晴。

美晴「私は……いつまで何も知らない人たちを贄に捧げ続けなければならぬんですか！」「荒御霊はどうしたらみんな和御霊になってくれるんですか！？」

□  
髪から垂れる雨しずく。

美晴「いつ……友達を作っていい私に……なれるんですか」

「教えてください……お狐様」

「25」

□  
ザアアアア……

座り込んだ美晴と沈黙する祠の上から降り続けてる雨。

□  
沈黙してる狐の人形。

□  
雨の降り続ける森。

□  
雨の降る町中。

□  
（場面転換）博昭の部屋。  
博昭「うゝ、濡れた濡れた。いきなり豪雨ってなんだよあつたく。」

半裸で、タオルを使っている。  
ぴんぽん

「26」

□ 玄関

博昭「はい……え!？」

□

玄関の前に傘を持って立ってたのは華村。  
ザー――

博昭「華村先生!？　なんで……」

□

華村（無気味に笑い舌なめずり）「うふふ……」

□

博昭「？」

□

ビシャアアツ!

落雷とともにいきなり溶けてゲル状の物体となる華村。

博昭の声「!!」

「27」

□

ゲルに飲み込まれていく博昭。

博昭「なんだ!　なんだこれはあああっ!？」

□

雨の中、傘もささずに遠くから見ている美晴の姿が。

□

博昭「更科!　更科!　助けてくれえ!」

□

しかし飲み込まれていく博昭。

□ うわあああああ……

□ どんどん飲み込まれて行く博昭。

「28」

□ ゲルの中に浮き出る華村の頭部。

華村「更科さん、あなたのものをつちやったかしら？ ふふふ……」

□ 雨に濡れて怒りの表情の美晴。

□ 華村（またゲルに溶けていきながら）「あらまあ……嫉妬してるのね

あなた……ふふふふふ」

□ 雨か涙か、美晴の頬に流れるもの。

美晴「…下劣ね。」

美晴は歯を食いしばり、雨雫を払うような手つきでお札を額の前に掲げる。

< 終 >

### 第三編「祟り祠（たたりほくら）」（後書き）

当時『河童沼』にいただいた批評、「もつとヒロインの心理を描くべき」「設定がよくわからなくて不親切だ、ヒロインの設定を説明しろ」他いったいくつかの批判に対応して書いた話でした。

これを掲載した後、「これはシリーズ物ではなく連載物にしないとダメ。ヒロインにライバルも登場させないといけない。また、主人公が毎回変わるのもダメ、美晴自体を主人公にすべき。」というような批判もあり、それに従ってこの次の『浄霊者』からは美晴が主人公の連続物として書きました。

……そうしたら雰囲気が変わってしまい、「完成度が落ちた」とも言われましたが、もともと苦手ジャンルを無理な制約で書いててそんなに何もかも完璧にできる力があるなら、とつくにプロで活躍しとつたろうし。（TTT）

では次回もよろしくおねがいします。

## ぱくぱく おばけ先生（前書き）

キャラは支持されてた割に内容は酷評続きで、気分が悪くなつたのを何とかしようという気分転換目的だけで書いたわるあがきでした。かなりふざけてます。推敲もロクにしてませんし、手抜きで、たぶん辻褄も合ってます。

題名も、批評掲示板で華村を指した冗談をそのまま使ってしまったという……完全に内輪ネタの悪ふざけ編でした。（汗）

### ■あらすじ>

内容は、無いよう。。。

### ■登場人物>

華村冴子：古典の先生

更科美晴：霊能者でいじわるな女生徒。

浄雲：美形で生真面目な青年僧。

後藤哲男：転校生。

水上紀久：苛められっこ。

真里谷博昭：美晴に興味を持つ男。

春樹：いじめっこ

達也：いじめっこ

俊郎：いじめっこ

岩神泰造：美晴の伯父で常川稲荷の管理人。

## ぱくぱく おばけ先生

「1」

□

T「ぱくぱく お化け先生」

「2」

□ 教室。

黒板の前に立つ華村。

華村（につこり）「え〜〜〜、来週の水曜日はいよいよ修学旅行です」

□

めんどーくさそーに聞いている生徒達。

華村の声「蒙木台高校の修学旅行では毎年、問題を起こしたり行方不明に

なったりする生徒が出ていますが、今年は不祥事がないように気を付けて

ください」

□

ゴゴゴゴゴゴ…

急に背景がホラーっぽくなる。

華村「もしもこのクラスの誰かがそんな不祥事を起こしたら……………」  
焦って腰が引ける生徒達。

「3」

□

華村、スライム化して襲ってくる。

華村「私が食べちゃうから」（とくに男子）！！」

うわあああああっ！！

逃げ惑う生徒達。

美晴（怒りの表情でお札をかざして）「毎年あんたが不祥事起こしてるん

じゃないのっ！？」

□ 教員室。

美晴がコピーをとってる。

ウィイイン

美晴「ふう」

□

博昭（にこにこ）「更科さん、なにやってんの？」

□

ウィイイン

美晴（そっけなく）「修学旅行のしおりを作ってるの、じゃましないで」

□

博昭「手伝うよ」

コピーが終り紙を揃えてる美晴

美晴「じゃましないで！」

「5」

□

博昭を置いて去る美晴。

美晴「まったく、この忙しい時に」

□ 河童沼。

ほとりに立つ美晴。肘を広げ両手でお線香を捧げ持ち、（道教風）

美晴「エロエムエッサム、我は求め訴えり」「高天原に神つまり

ます

アラアの神よ、迷える子羊を導き給え、アーメン弥陀仏、  
エッサーホイサー」

□

美晴（無表情で）「ふう。三ヶ月もかっちゃったけど、ようやく  
水神が

生まれそうだわ」

□

美晴の後ろから河童沼を見る構図。

美晴「カッパさん、うまく鎮まったら常川稲荷に来て御利益見せて  
ね」

「そうしたら神様留守の神社がもつかるから」

沼「（汗、汗、汗）」

「6」

□

浄雲（いきなり大声）「喝ーっ！」

美晴「わっ、びっくりした！！」

□

浄雲「荒魂を和魂にしても根本的解決にはなっていない  
魂は悟りを開かせ成仏させなければまた荒魂に戻る」

□

美晴（冷たく）「……あなたとは気が合いそうにないわ」

□

華村「オホホホホ　そうよ、更科さんは男性恐怖症なのよそういう  
設定に

しなさい！」

美晴「いきなり出て来て勝手に決めないで！」

「7」

□

美晴の後ろから博昭。その後ろから浄雲。

博昭「へえ…男性恐怖症なの？」

美晴「なんであんたがついてきてるのよ」

□

博昭「たまたま行く方向が同じなん……」

□

前方にラブホテル群。

ジト目の美晴。

美晴「…下劣ね」

浄雲、ポツ。

博昭（あわてて）「たっ、たまたまだ、たまたま！」

□ ラブホテル横の祠。

美晴「こんなところにある祠もちゃんと鎮めておかないとね」

浄雲（合掌して）「おん。あばきやー。べいろ。しゃのう。……」

…」

「8」

□

ピン！

浄雲「ムッ？」

□

あおり。

浄雲（真剣な表情で）「台風が来る」

耳にイヤホン、手にラジオ。

美晴（汗）「死亡ニュースとか、お化け出没情報とかもラジオでや  
つてる

わけ？」

□ 学校。

キャプション「翌日——」

□

哲男「更科さんだっけ？ 教科書ありがとう。ところで学校の中案内して

くれない？」

美晴（心の声）「やかましい、それどこじゃないのよ#」

「9」

□

美晴が近づいていく先に春樹、達也、俊郎、水上紀久がいる。

春樹「よし 土曜日には河童沼で泳ぐぞ」

□

扉の影で冷ややかに見てる美晴。

美晴（心の声）「水上くんは痩せててちび…生け贄にしても栄養無さそうね」

□

美晴「水上くん、話があるんだけどちょっと付き合ってくれない？」

驚く紀久。

紀久「おれに？」

□ 屋上。

美晴「憶えといて水上くん。後ろについていること。先に行つてはダメよ

絶対に」

「10」

□

紀久を残して屋上から去る美晴。

美晴（心の声＋汗）「生け贄は太ってる方が栄養ありそうだもんね」

□ 美晴「さて 修学旅行までに結界を全部チェックしとかないと」

□ バブルイン

校庭の隅、大木の影。  
小さな石の祠。

哲男「なんだろ、これ？」

美晴の声「……触らないほうがいいわ」

□ 美晴「訳の分からないものにやたら触れるのは赤ん坊のすることよ  
#」

□ 哲男「なんだよ、その言い方は！」

美晴（静かに青筋）「こつちだってイラついてんのよ」

□ 立ち去る美晴。

美晴「………忠告はしたわ」

美晴（心の声）「華村先生に食べられちゃうのは勝手だけど」

「11」

□ 美晴（心の声）「さて、と次の問題は……」

きよろきよろ

□ 通りすがりの華村。

華村「どうしたの更科さん？ まるで誰かを捜してるみたいだけど  
？」

□ 華村「ところで……そろそろ修学旅行ね」

美晴「……そうですね。でもしおりはまだ出来ていません」

□  
華村（にっこり）「うふふ……」コピー誌にこだわらなくてよ？たとえば……

オフセットのフルカラー印刷なんかどうかしら」

□  
ビクッー！

表情がこわばる美晴。

□  
華村「うふふ……あなた次第よね」

去っていく華村。

拳を握って見送る美晴。

美晴（心の声）「そのほうが手間かかるやろが！ー！」

「11」

□  
葬儀の祭壇。美晴の伯父の写真。

ちーん

なんみよーほーれんげーきよー

□  
孤独に座ってる美晴。

親戚達「だから、美晴は私が……」「いいや。私が。」「ちがいます、私が。」

「とにかく美晴を引き取った人が土地を貰えるんですよね？」

□  
美晴（溜息）「……下劣ね。」

「12」

□  
電話に出てる浄雲。

浄雲「はいわかりましたー」「美晴ちゃん香典返しのタオルができたから

取りにきてって」

□

フウ

美晴、溜息をついて立ち上る。

□ 夜の道。美晴が大荷物を抱えて歩いている。

□

ブロロロ… バシヤッ

美晴、音に気がつく。

□

沼から上がってきた紀久。

その近くに立つ美晴の足。

美晴（心の声）「あ、カツパさん、食べなかったんだよかった……」

「13」

□

ファサ……

紀久「!？」

頭にかぶさるタオル。

□

立ってる美晴

紀久「更科!？」

□

美晴、上機嫌。

美晴「……………」「…下劣ね。（半裸だから）」

□

背を向けてしまう美晴。

紀久「あ…………」

美晴（心の声）「さて 早くタオルとどけなきゃ」

「14」

□ またまた学校！

キャプション「そして月曜日っ！」

□

教員室、華村の机。

華村「え？ 郷土史料の古文書？」

□

華村「そうね……一人では無理だけど二人で徹夜で調べればなんとか」

「今夜宿直なの夜に宿直室まで来てくれる？」

哲男（赤い顔）「あ、行きます行きます！」

□

出て行く哲男。

華村「ごはん 確保」

□ 廊下。哲男を置いて去る美晴。

美晴「華村先生には近づきすぎない方がいいわよ（ああ見えていじわる

だから）」「忠告はしたわ」

「15」

□

歩いてる美晴。音に気づく。

ドボン！

□

バイクが沈んでいく河童沼

美晴（汗）「あっちゃあ……あらみたま荒魂がふたつになっちゃった。」

「まいったなあ……もう少しで和魂<sup>にぎみたま</sup>にしてあげられたのに……」

□  
美晴「一荒魂の水神さん…水上くんの魂を鎮めるのを手伝ってあげてね……」

ビリッ……  
お札を破る。

美晴「…もうつきあってらんないから」

□  
（場面転換）夜の校舎。  
ぐちゃ…ぐちゃ…  
動き出す物体。

「16」

□  
美晴「華村先生は後藤くんのことを気に入ったみたい」  
どんっ

美晴、哲男を突き飛ばす。

□  
うわああああああ！！  
ぐちゃ…ぐちゃ…

食われていく哲男

□  
美晴「これでこっちは解決。修学旅行先では誰も食べないでね  
華村先生」  
ぐちゃ…ぐちゃ…

哲男を食ってるスライム状の物体。  
スライム「うーんどうしようかなー」

「17」

□ キャプション「さらに翌日」  
博昭「ちえっ！」

ガッツ！  
祠を蹴飛ばす。

□ 美晴「なんてこと…自分が何をやったかわかってるの？」

□ ザーーーーッ！  
雨が降り出す。

美晴（心の声）「あ！ そっぴや台風来るんだっけ、洗濯物出しっぱなし」

□ バシャ…バシャ…  
去ってゆく美晴。  
呆然としてる博昭。

「18」

□ 大暴風雨の中の学校。  
ザーーーーッ！  
ドドドドドド

キャプション「そしてついに水曜日！」

□ 教室。全員汗。

華村「え、修学旅行を前にして行方不明者が6人も出てしまいました」

「しかも交通機関も台風で止まってしまい復旧待ちで全員今夜は学校泊まりです」

□

外。雨の中、レインコートを着てしゃがんでる美晴。

華村「あら 祠、なおしちゃうの？」

美晴（無表情に）「あたりまえです」

「19」

□

華村「ウッフ あなたのとりにまきを一人食べちゃったの、まだ怒ってるの？」

美晴「とりまきなんかじゃありませんよあんなやつ」

□

浄雲（拝みながら）「そうそうそんなもの作ったら比丘尼になれませんかし」

美晴「な・り・ま・せん！」

□ 夜っ！

夜の校舎。

□

博昭「いっつ・タイム・トゥきもだめし〜い」

□

ワイワイ

くじ引きしてるみんな。

博昭「よし更科さんとペアゲットお！」

美晴「・・・細工したなこいつ（汗）」

「20」

□

華村「あんたたちふたりはちょっと危険だから私がつきそいます」  
博昭「ちえっ」

□ 懐中電灯を持って歩いてる3人。

華村「夜の校舎って不気味ね」

博昭「そうですね」

美晴「……………（汗）」

□

しなだれかかりっ

華村「あたし、お化けとかって苦手なの……何か出たら守ってね

真里谷くん」

博昭「は、はいっ（汗）」

博昭にしなだれかかる華村。

後ろで角生やしてる美晴。

「21」

□

コンコン……

窓を叩く音。

□

三人、窓に目を

□

コンコン……

□

三人、窓を見て驚愕。

□

闇の中に浮かぶ二つの顔。

はつきりとは見えないが河童のような。

河童「Hello, Friends！」

「22」

□  
驚愕する三人。

□  
うわあああああ……  
ひいひいひい……  
ぎゃああああ……  
ひえええええ……  
ちよつとおおお……  
夜の学校に響き渡る悲鳴。

「23」

□  
パニックしてゲル化した華村、博昭を食ってしまった。

華村（半泣き）「きゃああああつ！」

博昭「うわああああ！」

□  
びっくりしてる美晴と河童達。

□  
どんどん飲み込まれて行く博昭。  
うわあああああ……

「24」

□  
泣きながら逃げていく河童達。  
美晴「ちよつと華村先生！ なにやってるんですか！ 不祥事です  
よ！……」

□  
ゲルの中に浮き出る華村の頭部。  
華村「あら？ 更科さんあなたのものをつっちゃったかしら？ ふ  
ふふ……」

□

雨に濡れて怒りの表情の美晴。

□

美晴「…下劣ね。」

齒を食いしばり

お札を額の前に掲げる。

< 終 >

#### 第四編「浄霊者（じょうれいしゃ）」（前書き）

この話から、連載想定の内容となりました。

##### ■粗筋>

美晴は、黄泉返りつつある荒御霊を鎮める使命を持った巫女。乏しい霊力の限り「  
を尽くして人知れず妖霊を鎮め、被害を最小限に抑えてきた。だが彼女の前に現れた浄雲は、荒御霊を抑えるのではなく、消滅させることによる浄霊ができる仏僧だった。美晴のやり方を「霊を中途半端に苦しめる」と異を唱える浄雲は、和魂となった荒御霊まで浄霊を企てる。しかし、その和魂には老婆が願い事をかけている真つ最中であつた……。

##### ■人物>

更科美晴：冷たく無気力ない感じの美少女。  
浄雲：旅の仏僧。20歳くらいの青年。  
師僧：浄雲の師。顔は出ないが老人。  
布教者：新興宗教の布教者。  
岩神泰造：美晴の伯父。重病。  
奥さん：近所の奥さん  
中里：中里の伯父さん。泰造の兄。  
谷原：谷原の伯父さん。退蔵の兄（長兄？）。  
華村冴子：古文担当の教師。美女。

#### 第四編「浄霊者（じょうれいしゃ）」

「1」

□ シャラン… シャラン…

2人の旅装の僧が、日差しの強い町中を歩いている。（師僧と浄雲）

日差しの強さに、背景も二人の姿も霞んでいる。

二人とも釈杖と鉢を持っている。

師僧（小声）「…什摩<sup>そも</sup> どこであろうと野山<sup>やま</sup>には獣が棲んでおり物の怪というものがある…」  
「野山<sup>やま</sup>が拓かれ町になってたとえ獣がいなくなっても、物の怪や魔霊がすべてなくなるわけではない…」

…」

□ 師僧（小声）「不浄な存在となってしまうた衆生にも菩提心を起こさせ

仏門に帰依させ成道の道を指し示す…これがわれら仏徒のつとめである

わかつておるな 浄雲」

浄雲（小声）「はい お師様」

□

師僧（小声）「それにしても酷い処<sup>ところ</sup>だ…土地神がいないのか？

それとも…」

「2」

□ T「浄霊者」

□ 民家の玄関先。

布教者が来ている。

布教者「あなたはですね霊の恐さをわかっていないんです」

「3」

□

奥さん「は、はあ……」

布教者「神はこの世に聖典を遣わされたのです。『めざめの会』の教祖様が

それを書物に残されました」「これを読まなければあなたただでなく一家の

皆さんまで不幸になるのですよ」

□

外を通りかかる美晴。無気力な表情で横目で見ている。

□

奥さん「すみませんうちは浄土宗、なむあみだぶつですからそういうのは

結構です」

□

布教者「昔は知りません。ですが今の仏教にどれだけの霊力ちからが

ありますか？ お寺だって金もつけのことしか考えてない。ちがいますか？」

美晴（後ろから）「あのう お話中、すみません」

□

奥さん「あ、お稲荷さんとの……」

美晴「閲覧版です。」

奥さん「ありがとうっ！ さっそく読まない」と

□

ボタン

扉が閉められてしまう。外に残った布教者と美晴。

布教者「……」

美晴「……」

「4」

□

ジロリ

布教者「…なぜ 布教の邪魔をするのですか」

□

美晴（無気力に）「…回覧版を届けにきただけです」

□

布教者「あなた元気が無いですね。 なにか悪い霊が憑いてるんじゃない？」

私は今、そういう不幸な人の為に本当の神の教えを……」

美晴「…すみません、帰りますんで」

□ 帰る美晴。 ついてくる布教者。

布教者「いいですか。 今の世の中はなにかと……」「つまり間違った教えに

支配されて世界はどんどん……」「今こそ正しい神の教えにですね……」

□

常川稲荷の鳥居。

□

その前に立ってる美晴。

美晴「うちは神社の管理人なんです。 だから宗教はけっこうです」

「5」

□

布教者（唾を飛ばしながら）「何を言ってるんですか！ あなたの ような人々

こそ本当の神の教えに目覚める必要があるのですよ。」「いいですか

わが『めざめの会』は宗教学者の高村先生にも『理想的宗教の形だ』と

評されてましたし、教祖様はローマ教皇やダライ・ラマにも認められ……」

□ 美晴「……その先生とローマ教皇とダライ・ラマは、入信したんですか？」

□ 布教者「え……それは……」  
美晴「……」

□ 布教者「とにかく！　こういう淫祠邪教は人を惑わす不浄な宗教なのです！」

祠の前の狐の人形をはたいて叩き落とす。

□ 美晴、後ろから止めようとする

美晴「乱暴はやめてください！」

布教者「なにするんですか放しなさい！」

???（絶叫）「喝ーっ！！」

「6」

□ シャラン……

枳杖を手に旅の僧（浄雲）が登場。

浄雲「あなたの宗教的情熱はよくわかりました。だけど他人の家の設備を

荒らすのは犯罪です」

□ 呆然としてる美晴。

布教者「またわけのわからん奴が来た」

□

もう2人がやってくる。1人は中里。（もう1人は公証人）

中里「お取り込み中かな？」

美晴「中里の伯父さん！」

中里「神社おいのりの儀式でもやってたのかい？ 泰造はどうだ？」

□  
美晴「あまりよくない状態です。意識のハッキリしないときが多く  
なつて」

□  
中里「弟に会うのもこれが最後かもしれないな。」「いいか？」  
美晴「はい。奥の部屋で寝ています」

家の方に去って行く中里。

「7」

□  
布教者「とんだ邪魔が入ったな」

浄雲「いや天のお導きかもしれない。こういうことは人知ではわ  
かない

ことです」

□  
布教者「いいですか！ 私はねこの祠に宿ってる不浄な低級霊を！」

浄雲「…この祠には霊も神もいませんよ」

□  
驚く美晴。

□  
浄雲（合掌）「そも、稲荷神とは」すさのおのおほかみ「須佐男大神の息女・

つかのみたまのおほかみ宇迦之御魂タキニ大神。しかしこの神でなくインド婆羅門教の神・

荼枳尼天を稲荷の名で祭っていることもある」

「この祠にもかつては荼枳尼天の霊が宿った痕跡がありますだが  
今は

何者もない」

□ セリフでつなぐ

浄雲、キツい目で美晴を見る。

□ 美晴、目を逸らす。

「8」

□ 浄雲「ここにはようやく結界らしきものが残ってるに過ぎない。壊しても

百害あつて一利無しです」

布教者「なんでお前にそんなことがわかるんだ!!」

□ 浄雲（合掌）「一切の先入観を離れ、あるがままに観てあるがままに感じよ。

難しいことですがそれが仏の教えです」

□ 美晴「あの……」

気がつく浄雲。

□ 美晴「ダキニ天て何ですか？ お狐様はダキニ天っていう名前なの？」

□ 浄雲「茶枳尼天とは……」

ピン

浄雲「ン!？」

「9」

□ 浄雲（真剣な表情で）「死者が出る」「かなり近くだ。君の家じゃ

ないか？」

□

ハッ

美晴「…伯父さん！」

□

タタタッ

走り去る美晴。

布教者「邪教の信徒だから罰が当たって死ぬんだ」

浄雲「あなたとこの信徒は死なない？」

□

布教者「もちろん死なない。永遠の命を得る」

浄雲（釈杖をささげ持ちながら）「成仏…ですか」

□

フフン！

布教者「そんな低級なものではない」「どれ私が亡者に引導を渡してこよう」

「10」

□

ジャッ

浄雲、釈杖で布教者を止める。

浄雲「まちなさい。あなたはあの家に歓迎されない。立ち去った方がいい」

布教者「お前にそんなこといわれる筋合いはない！」

□

浄雲「『不退去罪』というのを知ってますか？ 人の家で帰れと言われたのに

帰らないと、刑事犯罪になるのです。勧誘とか押し売りとかね」

「あなたがそうなったら団体にも不利益では？」

□

あせる布教者。

布教者「くっ…」

□  
ペツ！

唾を吐き去っていく布教者。

布教者「わけわからん！」「オマエらはみんな地獄行きだ！」

□  
浄雲（早九字を切って）「臨兵闘者皆陣列在前：ウン！」

「神域の結界を唾で汚す者が神の使徒のわけが無いと彼に早く気づかせ

給へ…」  
たま

「11」

□ 家の中の一室。

顔に布を被せられてる泰造。

手前には線香立てと線香の煙。そして白木の位牌。位牌に貼られた紙は

「敬祠院保善泰道信士

俗名 岩神泰造」

□  
□  
呆然と見ている美晴。

制服姿で呆然と正坐している美晴。その後ろで声が行き交う。

「？？？」「稲荷社の土地の管理は美晴にという遺言があるって？」

「？？？」「未成年に不動産の管理が出来るわけないだろう！ 第一岩神家じゃ

ない外戚じゃないか」

「？？？」「いやでもここは跡を継がなかったお兄さんが言うことじゃ……」

「？？？」「遺留分はどうなるんだ？」

「……「なにも通夜の席で相続の話を」  
「……「じゃあお前は権利放棄するんだな」  
「……「それとこれとは話が違う」

「12」

□

無気力に眺めている美晴。その後方で言い争ってる親戚達。

谷原「そんなことより 喪主は長兄の俺がやるけど異存無いな？」

「……「待てよ 美晴ちゃんじゃないんですか？」

「……「子供を喪主にするわけにいかんだろ、親族の恥だ」

「……「でも遺言は……」

谷原「会社の連中も来るんだぞ、俺の顔を潰す気か？」

「……「それとこれとは問題が違う……」

「……「で、葬儀の費用は？」

「……「美晴に出させればいい、土地を相続するんなら当たり前じゃろ」

□ 線香のくゆる泰造の枕元

「……「じゃあ香典も美晴に？」

谷原「美晴は高校生じゃないか。知り合いの持つてくる香典の額なんざ知れ

てる。美晴にやることはない」

「それぞれが知り合いの香典を持つて帰るべきだ」

「……「そんな話聞いたことないですよ兄さん！」

「……「でもそれじゃあ……」

□

けんけん「ごーごー」

美晴（溜息＋小声）「…下劣ね。」

「12」

□ 玄関口に入ってくる浄雲。

浄雲「失礼……浄雲と申します。ホトケ様が亡くなる時にこちらのお宮に

たまたまお邪魔しておりまして」「これも何かの御縁と思います  
お経の一つなりと上げさせていただきたいのですが」

□ 谷原「なに、真言の坊さん？　うちは法華のお寺さんに頼んだから  
あんたは

お呼びじゃ無いよ。忙しいんだ、帰ってください」

□ 谷原、浄雲に背を向け

谷原「ケツ、お布施目当ての乞食坊主が」

□ 浄雲「……」

浄雲、笠を直して出て行くとする。

□ 美晴、浄雲に気がつく。

「13」

□ 稲荷祠。

転がった狐を直している浄雲。その後ろから美晴が。

美晴「お坊さん」

□ 浄雲「名乗ってませんでしたね。私は浄雲。B山の学僧です」

□ 美晴「私は…更科美晴」

□ 浄雲「ホトケさんは美晴さんの伯父さまだそうで？」

美晴「唯一の家族で、ほとんど育ての父でした」

□ 浄雲「お養父とっさんが亡くなったわけか」「ご親族はあの調子だしこ

れから

どうされる？」

□

美晴、無表情。

□

美晴、無表情のまま涙だけ出てくる。

「14」

□

浄雲「泣くなというのが無理でしょう。今は思い切り泣いた方がいい」

「でも葬儀が終わったら泣いてはいけない。伯父さんを、心残り無く送り出して

あげなさい」

□

美晴、浄雲にしがみつく。

片手で背中を撫でてやる浄雲。

□

美晴、何かを叫ぶ。（無声）

「15」

□ 夜。

鳥居の前に車が止まってる。出て行く車もある。

「???」「じゃあ、明日、告別式で」

「???」「お疲れ様でしたー」

「???」「やれやれ、だ」

ボタン ブブウー

□ 座布団の乱れ飛んだ座敷。

食い散らかされた跡のテーブル。

誰もいないその向こうで横

たわる

故人・泰造。

□

縁側に腰掛けてる浄雲。

浄雲「伯父さんは亡くなる前に茶枳尼天の法を修したような気配がある

尋常な弔いかたで成仏できるかどうか……」

□

美晴「ダキニ天で……なんなの？」

「16」

□

後方に茶枳尼天のイメージ。

浄雲「ダキニ天とは……」インドの伝説にあるダキニー。人間の肝を食う

夜叉でした。しかし肝を食べば人は死んでしまふ。だから食うなら、命の

尽きる人の肝だけにするようにと釈迦如来に諭され、仏法守護の神と

なったのです」

□

美晴「人の…肝…？」

□

浄雲「残念ながら成道はしていない。一度人間に転生してからでない」と神は

成道できませんから」「しかし茶枳尼天は強力な力を持っていて、死後に

肝を差し出す約束をした者にはどのような願いでも叶えると言われています。

徳川家康も茶枳尼天の力で天下をとったという話が伝わっている」

「そして茶枳尼天は白い狐に乗って現れるといいます」

□  
美晴（考える）「白い狐……」

□  
浄雲「美晴さんからは強い気を感じるがおそらく何らかの行を修したことが

あるのでしょうか」「ダキ二天の秘法ではないようだが」

「15」

□  
美晴「お父さんや伯父さんからすこし習ったわ…荒れた御霊の鎮め方を」

□  
浄雲「！」「そうだったのか！」

□  
浄雲「これほど悪鬼魍魎の徘徊する町で、しかも守護神もないのに均衡が保たれてる……その謎が解けた！」「君の働きでありまた君が元凶だったんだ」

□  
美晴（不愉快そうに）「悪鬼魍魎って何？」「荒御霊はたしかに溢れているわ。

「だけど荒御霊は鎮まれば和御霊……神様になるのよ」

「16」

□  
浄雲「荒御霊…たしかに人が機嫌を取れば悪鬼魍魎も猛威を振るわなくは

なる。阿修羅や茶枳尼天のように善神にもなるだろう」「だが…

…」

□

キツく！

浄雲「一時のがれにすぎない！」「祭る人が絶えれば和御霊は再び荒御霊と

なる！」

□

美晴「どうしろというんですか」

浄雲「成仏させることです。魂が魂のまままで他者に害を与える…それは自らも

傷つけることだとなんとかして荒御霊に伝えて」

□

浄雲（合掌）「然れば魑魅魍魎といえども涅槃への道が開かれ仏とならん」

□

美晴（驚愕＋恐怖）「つまり……消すって言うの！？ 荒御霊を！  
！」

「17」

□

浄雲「消えるとかなくなるとかそういうことじゃない

ひとつはすべて  
一即多・多即一・色即是空

どう変わろうと世界の一部です。形を変えてまた現れる、そのために

今の形をやめる……」

□

美晴「今の形をやめる……死ぬってことじゃない、それ！！」

□

浄雲「形ある物は壊れる。諸行無常 諸法皆空、死もまた変化の過程に

過ぎない」

□

美晴「御霊は……御霊は人間より古くからこの地に住んでいた」「後から来た

人間が、都合で追い出したり消したりなんてそんな傲慢なことを！」

「侵略者が正しくて侵略された者が消えるべきだなんて、そんなことは

……有り得ない！」

□

浄雲「違っんだ美晴さん私が言ってるのは……」  
美晴「帰って…帰ってください」

□

浄雲、後ろ髪を引かれつつ立ち上がる。

「18」

□

下を向いて拳を握り締めている美晴。  
夜の闇の中に去って行く浄雲。

□

森の藪が風でかすかに動く。

□

翌日。道端の石碑。

石碑に読経している師僧と浄雲。

石碑「馬頭観音」(\*)

師僧(杖と数珠を持ち片手合掌)

「観自在菩薩

行深般若波羅蜜多時

照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色

色即是空 空即是色……」

（欄外注：馬などの動物が路上で死んだ場所に建てられる石碑。なお人間が路上で死んだ時には地蔵が置かれる。）

□ 師僧（合掌したまま）「般若波羅蜜多<sup>はんにやほらみつた</sup>の心を理解することは生きる人間にさえ

かなり困難だ」「まして人間でさえない存在に読経による同調だけでそれを

伝えることは……」

浄雲「お師様……」

□ 師僧（振り向いて）「わしはもう行かねばならん。しかしここは捨ておける場所では

ない。すでに結界も壊れておる」「浄雲 お前はしばらくこのあたりに残れ。

何が出来るかはわからんが……」

「19」

□ 緊張した表情で

浄雲「……」「……はい」

□ （場面転換）美晴の家。

泰造の葬儀の最中。僧侶が読経している（後ろ姿）。

読経（ページの最後まで飛び飛びに）

「妙法蓮華経如来寿量品偈」

「自我得仏来 所教諸劫数

………」

□ 弔問客の中に喪服を着た華村が親戚にお辞儀をしている。

読経の声

「無量百千万 億載阿僧祇  
むーりようひやくせんまんおくさいあーぞうぎー」

「……………」

□

美晴、制服姿で親族の中に座りお辞儀している。

読経の声

「常説法教化 無数憶衆生  
じようせつぽうききようげーむーしゆーおくしゆーじょー」

「……………」

「22」

□ 焼香する華村。（アップ）

読経の声

「令入於仏道 爾来無量劫  
りようにゆーあーぶつどーじーらいむーりようこー」

「……………」

□

読経の吹き出しでつなぐ

冷やかに横目で見ている美晴。（アップ）

□ （場面転換）白い紙で封印された稲荷祠。

□

稲荷祠の前に立つ浄雲。ふと見上げて。

□

浄雲「……………なるほど」

「21」

□

稲荷祠の真後ろ、木々の隙間から見える丘の上の蒙木台高校。

□

森の中、藪の蔭に狐の目のようなものが光る。

□ たそがれ時。町中を歩く布教者。  
布教者「くそ面白くない！」

□ 布教者「この町の奴らはろくに話も聞こうとしない」「みんなとめて地獄に

落ちろ！」

ぶつぶつ……

□ 常川稲荷の鳥居の前に来てふと気がつく布教者。

□ 鳥居のそばに、割れかけてる石の狐。

「22」

□ 布教者「こんな偶像をありがたがってるからダメなんだオマエらは！」

石の狐を思い切り蹴り飛ばす。  
ガッ！ バランスを崩す石像。

□ ドン！ 倒れて割れる石像。

□ 気持ちよさそうに、馬鹿にした笑い。  
布教者「ふん！」

□ 立ち去ろうとする布教者。  
その後から包むように襲い掛かる「気」。  
シャアアア……

「23」

□ 気になって振り向く布教者。

□ とたんに恐怖で顔が歪む。（アップ）

「24」

□ 巨大な白い狐を連想させる気の塊が布教者に襲い掛かる。

布教者（悲鳴）「うわあああああっ！」

□ 悲鳴でつなく。

狐状の気の塊、布教者を押し倒して押し掛かる。

□ 大きく口を開ける気の塊。

□ 恐怖に顔を歪ませる布教者。

□ 布教者「な、なんだ！　なんだこれは！！」

「25」

□ 気の塊に今にも食いつかれそうになって必死に抵抗してる布教者。

後ろの闇の中から近づいてくる、お札をかかげた美晴が。  
美晴「あなたは結界を壊して荒御霊を目覚めさせてしまった」

「怒り狂った御霊を鎮めるには贄が必要です。それも生きた贄が」  
布教者「おっ　おまえは邪教の信徒！」

□ 布教者「な、なんとかしろ！　これをどけろ！　早く！」

□ 美晴「私にそんな力はありません」「あなたの神様に助けを求めたらいかがですか？」

□ ゲワアアアッ

いまにも食いつこうとする狐状の気の塊。

布教者（絶叫）「助けてくれええっ！」

「26」

□ 美晴と別方向に現れた浄雲。

浄雲（早九字を切って）「臨兵闘者皆陣列在前！！」

驚く美晴。気の塊は動きが止まる。

□ 浄雲（絶叫）「喝——っ！」

□ グググ…ウウ

うな垂れるようにあとじさる気の塊。

□ 美晴「何をするよ浄雲！」

「27」

□ 浄雲（汗を吹き出しながら）「心霊に悪い業を重ねさせてはいけない！」

「これ以上の罪はやめさせるんだ、美晴さん！」

□ 驚いて呆然としてる美晴。

□ 浄雲「折伏！ 南無不動明王、ノウマク・サマ ندا・バザラ・ダン・

カーン！」

シャアアア……

気の塊、苦しんでいるかのように身を擦る。

□

シャアアア……

消えて行く、気の塊。

□

アアア……

消えて行く、気の塊。

「28」

□

一目散に逃げ去る布教者。

布教者「ひいひい！！」

□

美晴「……消したの！？」

□

浄雲「いや。いつときねぐらに戻ってもらったただけだ」「アレに悟りを伝えるには

私は未熟……だがいずれやらねばなりません」「力を貸してください、美晴さん」

□

浄雲に背を向け目をつぶる美晴。

美晴「……下劣ね」

□

美晴「あなたとは気が合いそうにないわ！！」

怒りの表情で立ち去る美晴と、後ろからそれを見送るしかない浄雲。

^ ^ ^ ^ ^

## 第五編「神域穢（かみつにわけがし）」（前書き）

### ■粗筋＞

伯父・泰造の死により美晴は一人暮らしになってしまふ。そんな常川稲荷に、猫が住みついた。美晴も猫との関係にぬくもりを憶え始める。そんなところへ、別の伯父が美晴の後見人として名乗り出た。

### ■人物＞

美晴：更科美晴、冷たく無気力な感じの美少女。

浄雲：旅の仏僧。20歳くらいの青年。

華村：華村冴子、古文の教師。

中里：岩神達義。中里の伯父さん。泰造の兄。

谷原：谷原の伯父さん。退蔵の兄（長兄？）。

温子：岩神温子。中里の妻。

洋樹：岩神洋樹。中里の息子。

猫：雑種で、大きめの野良猫。可愛い猫ではなく、ちょっと恐い感じ。

（でも実は鈍い）

## 第五編「神域穢（かみつにわけがし）」

「1」

□

シャツ！

御幣を振る美晴。

□ 美晴、稲荷祠に祝詞を上げてる。

美晴「神<sup>かん</sup>ながら魂<sup>たま</sup>ち栄<sup>は</sup>えませ、神ながら魂<sup>たま</sup>ち栄<sup>は</sup>えませ〜…」

□

パン！ パン！！

神社の森。木々の隙間から、丘の上に高校が見えてる。

□ 藪から美晴を見ている猫。

「2」

□

T「神域穢<sup>かみつにわけがし</sup>」

□ （場面転換）どこかの家の応接間。

谷原（扇子をパタパタさせながら）「とにかく死んだ泰造の土地のことを

はつきりさせよう」「住宅地の真ん中にあんな雑木林をほっとく手はない。

マンションにでもすれば収益が出る」

「3」

□

中里「常川稲荷のことか？」

谷原「美晴だってその方がいいに決まってる」「常川稲荷は宗教法人に

登録してないんだぞ？ あんな土地の相続税をどうやって払うんだ」

□ 谷原「収益の無い土地を受け継いでしまい税金が払えなくて一家心中なんてのは、バブル時代だけの話じゃないからな……」

中里「だけど宗教法人ではないにしても、あそこにあるのは一応神社だろ」

□ 谷原「屋上か屋内に祠を移せばすむことだ、都内ではどこでもやっている」

□ 谷原「あとは美晴のやつをどう説得するかだが……」  
中里（もったいつけて）「それだけは大丈夫だよ。泰造の最後の遺言書は

私があずかっている」

□ 谷原（驚愕）「なに！？」

「4」

□ ニヤッ

中里「死ぬ直前に会った。それは美晴も知ってる。そのときの遺言だ」

□ 谷原（驚いて）「しかし泰造はもう意識がなかったんじゃない……」

□ 中里「死ぬ直前に意識が戻るなんてことはよくあるはなしさ」「そこで遺言が

変更され、俺がそれを口述した。公証人も一緒だったから法的にも効力が

ある」

谷原（汗）「お、おまえ…まさか……」

□ 中里、ニヤリ。

中里「さあねえ。死人に口はないし」「兄貴はどんな遺言がほしい？」

□ （場面転換）教室

プリントが配られてる。

華村「これは『耳袋』といって江戸時代に根岸鎮衛という人が聞き書きを記した

書物の一部です」「この文章の要旨を現代語に訳してもらいます」  
え〜〜〜〜……（生徒達の溜息）

「5」

□ 華村「はい 次の部分…更科さん」

□ 立つてノートを読んでもる美晴。

美晴「牛込山伏町の寺院で、猫が鳩を狙うのを見た。和尚が追い逃がすと

猫が『残念だ』と言った」「怪しんだ和尚が猫を捕まえ問いたですと

『猫は十年も生きていれば物を申します……』…（中略）…

猫は三拝して出ていったがそれきり帰ってこなかった……（\*）「誰か（書き文字）」「あるわけねえよ そんなこと」

華村の声「静かに！ では次の部分……」

（\*欄外注：参考文献「日本怪談集妖怪編」今野円輔 教養文庫）

□ （場面転換）常川稲荷。

鳥居と、半壊した狐の石像がある。

「6」

□ 稲荷祠の前を通る美晴。

□ 白い狐の人形が並んだ稲荷祠。

□ 美晴、稲荷祠を横目で見ている。

（回想）

浄雲「…この祠には霊も神もいませんよ」「ようやく結界らしきものがあるに  
すぎません」

□ はっとする美晴。

□ ぶるぶる

美晴、目をつぶって顔を左右に振る。

□ パン！ パン！

雑木林にひびくかしわ手の音。

ザワザワ…

雑木林に風。

□ （場面転換）おふろ。  
かぼーん…

「7」

□

内置きのがス窯式で古い形式。胸まで風呂桶に漬かつてる美晴。

（惜しいところで見えない（笑））

無気力な表情。

□

美晴、風呂桶に沈みつつボーツとしてる。

（回想）

浄雲の声「今は思い切り泣いた方がいい」

□

美晴、顎まで沈んだところで、

（回想）

美晴、泣きながら浄雲にしがみつく。

（現実）

ボツ！

美晴、顔が赤くなる。

□

ザブツ！

怒って勢いよく立ち上る美晴の後ろ姿。

（もうちょっとなのに波でお尻が見えない（笑））

「8」

□

和室に布団を敷いて寝てる美晴。

□

ボーツと目を開けてる美晴。

□

ボーツと目を開けてる美晴。

（回想）

浄雲「力を貸してくれないか、美晴さん？」

□  
がばっ！

美晴「…もうっ！！」

不快そうな表情で起き上がる美晴。（パジャマ姿）

□  
じゃーーーーー  
排水溝に流れ込む水。

「9」

□  
キュッ

蛇口を閉じる手。

□  
洗面所に立つ美晴。頭がびしょ濡れ。

美晴「一体なんなのよ…」

□  
水滴を垂らしながらふと横を見る美晴。

□  
暗い天井。

□  
消えた白熱球。

□  
継ぎ当てされた障子。

□  
廊下の隅の物入れの扉。

「10」

□

□ 暗い廊下と、開け放たれた障子の向こうに和室。

□ タオルで頭を包んだ美晴。

□ 美晴（心の声）「そっか……この家……いま、私一人なんだ……」

□ かたん…

□ 美晴「！」

□ 美晴、部屋の中に入って

□ 美晴「押し入れ？」

□ ガラッ

□ 押し入れが開かれる。

□ 布団の上でうずくまってる猫がこっちを見る。

（さっき見た猫）

「11」

□ 目が点になってる美晴。

□ 猫「……にゃあ」

□ 美晴「一体どこから……」

□ 場面転換

□ がつがつがつ

□ 煮干しかけねこまんまを食べてる猫。

□ 布団の中から見つめてる美晴。

□

美晴、煮干しの袋を見て気づく。

美晴「あ そうか……猫に人間用の煮干しを続けて与えてると塩分が強すぎるっ

て何かで……」

「12」

□

夜の道。

美晴、ジャージ姿でコンビニの袋を下げてる。（猫餌を買ってきた）

□

そよ風が出てる。

美晴「いい風……」「ちょっとだけ河川敷を歩いてから帰ろうかな……」

□（場面転換）橋の近くの土手道。

美晴、コンビニの袋を下げて歩いてる。

□

ふと気がつく美晴。

□

美晴の声（驚き）「浄雲っ！」

橋の下の草っぱらにビニールシートを敷いて寝ていた浄雲も、美晴に

気がつく。側に置かれてるのは頭陀袋と笠と杖。枕元には線香立て。

□

浄雲、身を起こしながら。

浄雲「美晴さん……？ こんな時間に一人で買い物ですか？」

「13」

□ 浄雲「日本はたしかに外国よりは安全だけれど、夜中に女の子が一人で

歩くのはあんまり……」

美晴「そんなことよりなんであなたがこんなところにいるの!？」

□ 浄雲「……………結界がどんどん壊れて、この辺りは悪鬼魍魎が溢れています」「少しづつでもそれを抑えられればと思って」

□ 美晴（激しく）「いや、そんなことじゃなくてっ!」「なんで橋の下で寝てるわけ?」

□ 浄雲「これはしたり! 流れに漱くすぎ石に枕す、古来それが修行の旅というもの……」「……というのは建前。正直言えば 今どき見ず知らずの

流れ沙門を泊めてくれるような寺はなかなか（汗）」

□ 美晴（目を逸らしながら）「じゃ…………じゃあ…………うちへ来る?」「布団くらい

あるわよ」

□ 浄雲（困惑）「…………」「大変有難いお話ですけど、女性の一人暮らしの家に

出家が泊まるわけには」

「14」

□ 美晴（赤面）「バツ…………部屋が別々なのは当たり前でしょう!」

浄雲（落ち着いたまま）「世間はそう見ない。それに私だって異性

への煩惱が

完全に無くなってるわけではありません」

□

ドキッ！

美晴、たじつとする。

（回想）

美晴、泣きながら浄雲にしがみつく。

□

浄雲「ここで美晴さんとお話できたのも　きっと何かのご縁でしょう」「ですが

私のことなら心配しないでください。野宿は慣れていますし、さいわい冬では

ありませんから」

□

ガサガサ

美晴、溜息をつきながら袋の中を探る。

□

トン

美晴、草に置く、お茶のペットボトル。（500mlの烏龍茶）

浄雲「？」

□

美晴（体をかがめたまま）「ウーロン茶なら、戒律には触れないわよね？」

□

浄雲（ペットボトルを持ち）「私に？」

美晴、肯く。

「15」

□　美晴、きびすを返して立ち去る。

美晴「じゃ 風邪をひかないように気をつけて」

浄雲（合掌して見送る）「ありがとうございます。」

南無観世音菩薩、御仏の恵みが美晴さんにもありますように」

□

去って行く美晴の後ろ姿。

美晴（心の声）「ただの同情よ」「それだけなんだから……」

ぶつぶつ……

□

浄雲、手にしたペットボトルを見つめてる。

浄雲（心の声）「……野宿に烏龍茶は、お小水がやたら近くなって困る……」

なんてこと知らないんだろっな、やっぱ（汗）」

□

（場面転換）稲荷祠前。

チュン チュン…

ジャージ姿で竹箒で掃除してる美晴。

□

狐の置物が並ぶ稲荷祠。

□

隅でうずくまってる猫。

首にリボンが結ばれてる。

「16」

□

チュン チュン

地面に降りてくる雀。

□

それを見ている猫。

□

シャーッ！

雀に飛びつこうとする猫。  
おどろく雀。

□  
バシッ！

猫をたたく竹箒。

□  
美晴「こらっ！ 神域<sup>しんいき</sup>で殺生しちゃ駄目でしょ」「あとで猫缶あげる  
からがまんしなさい」

□  
猫（去りながらつぶやき）「本能なんだからしょうがないじゃん…」  
…」

□  
ハッ！

驚く美晴。

□  
擬音でつなぐ。

猫「！」

しまった、という猫の横顔。

「17」

□  
猫、おそろおそろ振り向く。

□  
美晴「待ちなさい！」

逃げる猫と追う美晴。

□  
（場面転換）縁側。

首輪をつけられ柱に繋がれてる

猫。皿に入れられた餌を食べてる。

□

美晴（汗）「つまり……」

「18」

□ 美晴「十年間生きた猫は人間の言葉を喋れるようになるって……本当だったの？」

□ 猫「うん。本猫<sup>ほんにん</sup>の才能にもよるけどたいていは」

□ 猫（皿を舐めながら）「猫は十七・八年も生きればちょっとした神通力も持てるよ。もつともそこまで生られる猫はあまりいないけどね」

□ 美晴「あなたも 十年も生きたようには見えないわよ？」

□ 猫（ニヤリ）「人間の言葉は狐に習った」「神社の裏に森があるだろ狐の巣穴の跡があるんだ」「そこにいた狐の霊に」

□ 美晴（驚く）「和御霊<sup>にぎみたま</sup>…がいたの？ お狐様の森に！」

「19」

□ 猫（くつろぎながら）「昔はどこにでもいたらしいねえ」「人間の間にも

猿かなんかの姿の御霊に武術を習ったなんて話があるんでしょう？」  
驚いて聞いている美晴。

□ ピピピピピ……

アラームの声「8時20分です」

アラームに気がつく美晴。

□ 美晴、急いで上着を着ながら  
美晴「ごめん……学校の時間」「帰って来てから詳しい話を聞かせてね！」

□ バタバタバタ……  
見送る猫。

□ 猫、あくび。

「20」

□ ブブー……ボタン！

眠りかかってたところで音に気がつく猫。

□ 緊張する猫。

□ 外。

車を降りてくる、中里。そして温子と洋樹。

洋樹「ほんとにボロい家」

温子「こんな陰気なところに住まなきゃいけないの？」

中里「遺産の土地を手に入れるまでの我慢だよ。」

□ ガチャガチャ

中里、鍵を開けてる

中里「いいか」「遺言書をたてに名義書替え請求を裁判所に提出する。」

出頭命令は郵便で美晴に届く」「それを握り潰し、美晴の実印を盗んで

兄貴への委任状をでっちあげる。兄貴とはすでに話がついてる」

「21」

□ 繋がれたまま下から観察してる猫。

□ きよろきよろしながら家の廊下を歩く三人。

中里「執行も同じだ。美晴が知らないうちに、土地の名義は変更できる」

「美晴が相続税を払い終わるころにはすべてウチのものだ」

□ 中里の足元で怒ってる猫。

猫（怒る）「フーツ！！」

中里の声「な　なんだ！？」

□ 家の外観

声「うわっ噛み付いたぞ」「何この猫！　飼ってるの？」「こんな汚えの

ノラに決ってるよ」「逃がすな！」

□ （時間経過）下校してきた美晴。

「22」

□ パン　パン！

美晴、祠の前で柏手を打つ。

□ ふと気がつく美晴。

□ 祠の近くの地面に血の滴れた跡。

□ 美晴「…血？」

美晴、ふと気がつく

中里の声「おかえり美晴ちゃん」

「23」

□

座敷で向かい合って座ってる二人。

美晴「中里の伯父さんが後見人……ですか」

中里「そう。伯父さんたちみんなで話し合って、それがいいってことに

なっただ」。「だから美晴ちゃんは安心して学校に通っていればいいんだ

よ」

□ フキダシでつなぐ。

美晴、視線を逸らして

美晴「……………」。「わかりました。よろしく願います」

中里の声「じゃあ今日から一緒に住むからねもう淋しくないよ」

□

美晴「ところで……猫がいまませんでしたか？」

中里の声「猫？ 飼ってたのかい？」

□

美晴の声「いえ……野良だったんですが昨日から住み着きまして」  
（こまかすように）

中里「野良猫はきまぐれだどこか行っちゃった

んじゃないか？」

□

美晴、柱の方を冷ややかに見てる

□

紐とお皿がそのまま残ってる。

「24」

□ 夜。一室で寝ている中里。寝苦しそう。

中里「うつん…」

□

ふと目を開ける。

中里「う…」

ピチャ… ピチャ…

□

起き上がる中里。

中里「なんだよ…水道の栓、閉まってないのか？」「ボロ家だからなあ

まったく」

隣の布団は空。

□

中里、廊下を歩いている。障子の中から音が聞こえる。

中里「？」

ピチャ… ピチャ…

□

ガラッ！

障子を開ける中里。

中里「おい 洋樹！ 夜中に何やって……」

「25」

□

部屋の中。

「！！」

人間のように正坐した巨大な猫が、バラバラになった洋樹と温子の

死骸を食っていた。その猫がこちらを向いたところ。

□

巨大猫、口から血を垂らし、血走った目で睨みつけながら…

巨大猫（ニタリ）「…ニャ〜〜」

ピチャッ（血の音）

恐怖に顔を歪める中里

中里「う……う……」

「26」

だだだっ

中里「うわああっ！」

走り出す中里。

□ 玄関。

がちやっ がちやっ

美晴の声「どうしたんですか、中里の伯父さん？」

□ 暗い廊下をやってきた美晴。

中里「み 美晴ちゃん！」

□ 中里「い 今でかい猫が！」

美晴「猫？」

「27」

□ 中里「なんなんだあれは！ なんで神社にあんなものが出るんだ！

！」

□ 美晴「伯父さん……殺生して神域<sup>かみつにわ</sup>を血で汚しましたね」

「…猫を殺したでしょう!？」

□

中里「え…いや…だつて…」

□ 中里「しかたなかったんだ！ 噛み付いてきたから…」

□ 美晴「あの猫は無念の思いを残して死に、荒御霊となりました。かわいそうですけれど奥さんと息子さんは贄になりました」

□ ガチャッ

中里「わけわからん！」「俺は警察へ行くぞ！ 殺人事件だ！」

□ 美晴（ひややかに）「どうぞ」

ガラッ（扉を開けた音）

「28」

□ 玄関を開けたところに、大口を開けて待ち構えていた巨大猫。

猫「シャー…ッ！！」

□ 断末魔の表情

中里「ぎゃあああああッ」

□ 美晴、冷ややかに溜息をつきながら、お札を顔の前に掲げる。

ピチャッ ピチャッ…（猫が血を舐めてる音）

美晴「やれやれ…下劣な人はこうやっていつも荒御霊を増やしちゃう」

「……生け贄を三人もお供えしたのだからおとなしく鎮まってね、猫の荒御霊さん……」

（祝詞）

はらいど

「……被戸の大神たち

もろもろ

まがごと

諸々の曲事罪穢れを

被い給え清め給えと

申すことの由を……」

<つづく>

## いけいけお化け先生（前書き）

いけいけお化け先生 （更科美晴シリーズ 個人的ストレス解消版）

作：阿僧祇

### ■解説＞

さらに悪ふざけしました。ろくに構成もしておらず、内輪ネタ度も上がり、もはや意味不明です、、、。とくにワリノリして勝手に投稿シナリオをネタに使ってしまった方々（\*）、もし抗議が届いたら訂正しますのでご勘弁ください。

悪ふざけや内輪ネタに不快を感じる方はご覧にならないよう、お願いいたします。

< ( | ; >

（\*内容に、初発表場所での他の人の投稿作品のパロディが含まれていました。）

### ■粗筋＞

荒らすイージー。（なんだそりゃ）

### ■人物＞

華村冴子：古文担当の教師。美女。

更科美晴：冷たく無気力ない感じの美少女。

浄雲：旅の仏僧。20歳くらいの青年。

師僧：浄雲の師。顔は出ないが老人。

布教者：新興宗教の布教者。自己チュー。

岩神泰造：美晴の伯父。重病。

## いけいけお化け先生

「1」

□

シャラン… シャラン…

2人の旅装の僧が、日差しの強い町中を歩いている。（師僧と浄雲）

日差しの強さに、背景も二人の姿も霞んでいる。

二人とも笠を被り杵杖を持っている。

師僧（小声）「…什摩<sup>そも</sup> どこであろうと野山<sup>やま</sup>には獣が棲んでおり物の怪というものがある…」  
「野山<sup>やま</sup>が拓かれ町になって、たとえ獣がいなくなっても物の怪や魔霊がすべてなくなるわけではない……」

□

師僧（小声）「不浄な存在となってしまうた衆生にも菩提心を起こさせ、

仏門に帰依させ成道の道を指し示す……これがわれら仏徒のつとめである。

わかつておるな 浄雲」

浄雲（小声）「はい お師様」

□

師僧、笠に手をやり汗をかきながら困った様子で  
師僧（小声）「……」「それにつけても金の欲しさよ」  
すっころんでる浄雲

「2」

□

T「いけいけお化け先生」

□ 民家の玄関先。布教者が来ている。  
布教者「あなたはですね、霊の恐さをわかっていないんです」

「3」

□ 華村「は、はあ……」

布教者「神はこの世に聖典を遣わされたのです。『めざめの会』の教祖様が

それを書物にされました」「これを読まなければあなただけでなく一家の皆さんまで不幸になるのですよ」

□ 外を通りかかる美晴。無気力な表情で横目で見ている。

□ 華村「それを読めば不幸ではなくなるのですか？」

□ 布教者「！」「そ、そうです！ あなたの前に天国が開けるのです！」

□ 華村（心の声）「天国……」

（妄想）

うわああああ……

ひいひいひい……

悲鳴を上げる学ランの男の子たちをどんどん飲み込んでるゲル状の華村。

博昭や哲男もいる

（現実）

うつとりして涎が出掛かってる華村。

「4」

□ 美晴「先生っ！ 回覧版ですっ！」

ドン！

華村「あっ、あら更科さん」

□ 美晴（ムツとして）「下劣な妄想はやめてください」

□ 華村「下劣な妄想なんかしてないわよ」  
書き文字「ちよつと食欲が湧いただけで」

□ 美晴（布教者に）「あなたも…こんな人に布教しても無駄よ食べられちゃう  
だけだから」

□ びっくり

布教者「え？ 食べられちゃう？」

「5」

□ いそいそ…

布教者「だめです、私は神に仕える身ですから…」

華村＆美晴「と言いつつ服を脱ぐなあっ！」

□ （場面転換）稲荷祠の前。

布教者「とにかく！ こういう淫祠邪教は人を惑わす不浄な宗教なのです！」

祠の前の狐の人形をはたいて叩き落とす。

□

ドガッ

美晴、後ろから布教者の後頭部に飛び膝蹴り。

美晴「乱暴はやめてください！」

布教者「ぶっ！？」

□

ベキイツ！

美晴、布教者に飛びつき腕十字。

美晴「乱暴はやめてください！」

布教者「ぎゃうっ！」

「6」

□

美晴、布教者にマウント（馬乗り）しマウントパンチ（顔面連打）。

ズガッ ドガッ ベギッ バギッ ドスッ

美晴「乱・暴・は・や・め・て・くださいっ！」

布教者「うわあああ、乱暴はやめてくださいっ！」「ギブ、ギブ、ギブーっ！」

布教者、必死にタップ。

□

シャラーン……

枳杖を手に浄雲が鳥居の影に。

浄雲「……………出るタイミングを失した。（汗）」

□（時間経過）

ペッ！

唾を吐き去っていく布教者。

布教者「オマエらはみんな反則負けだ！」

□

見送る浄雲と美晴。

美晴「お坊さん」

「7」

□ 美晴（冷ややかに）「ダキ二天て何ですか？ それつおい？」

□ 浄雲（真剣な表情で）「めちゃんこつおい！」

□ あおり。

美晴「…では私は誰を倒せばその人への挑戦権を得られるのですか？」

浄雲（汗）「…ちよつとまでこの漫画はいつから格闘技物になった」

□ 美晴（よそ見し燃え上がる背景）「まずは全宇宙女子プロレスから  
マイナーアイドルとしてデビュー、九条清美、高村あかね、そして  
マスクドターキー・ITSUKI・鬼姫結梨花と日本中の妹プロ  
レスラーと戦い

自分で歌う入場曲のCDも出し、“最強の妹”というキャッチコ  
ピーで

REALに殴り込…」

浄雲（汗）「あんた一体誰の妹？」

□ 水着を着、マイパイプイスをかかえて現れた華村。

華村「おほほほ！ そうよ更科さん。私とタッグ組んでSittto  
団や

ジェニー&リカをなぎ倒し、世界ジュニアタッグベルトを奪い取  
りましょう！」

浄雲「Tsubasa」リングに羽ばたく少女たち”ネタは、  
ここの皆さんに

知ってる人少ないだろうから、そろそろやめなさい」

貼紙「CDドラマ第2弾2003年12月発売予定」

「8」

□ 家の中の一室。

顔に布を被せられてる泰造。

手前には線香立てと線香の煙。そして白木の位牌。位牌に貼られた紙は

「敬祠院保善泰道信士

俗名 岩神泰造」

□

呆然と見ている美晴。

□

制服姿で呆然と正坐している美晴。

???「稻荷社の土地の管理は美晴にという遺言があるらしいけど」

???「未成年に不動産の管理が出来るわけないだろう！ 第一岩神家じゃない

外戚じゃないか」

???「いやでもここは、跡を継がなかったお兄さんが言うことじゃ……」

???「遺留分はどうなるんだろ？」

???「なにも通夜の席で相続の話を」

???「じゃあお前は権利放棄するんだな」

???「それとこれとは話が違う」

「9」

□ けんけん ごーごー

美晴（溜息＋小声）「…下劣ね。」

□

華村「みなさん！ 言い争っててもきりがありません」

突然現れた華村に驚く一同。

□ 美晴（汗）「ど、どこから入ってきたの？」

華村の声「昔から、男が欲しいものを手に入れる方法はただ一つ！」

□

華村、アップでウィンク

華村「そう、それは、“バ・ト・ル”っ（はーと）」

「10」

□

カーン！

なぜかリング上。

12オンスグローブを着けたムエタイスタイルの博昭と、オーブンフィン

ガーググローブを付けたスパッツ姿の美晴が対峙している。

博昭「よし 更科を手に入れるぞ！」

美晴（汗）「待って 待って 待って！」

□

博昭のパンチを避ける美晴

美晴「どうしても格闘技物にしたいの！？」

博昭「原作者のシユミだ！ 書き易いんだっ！」

「11」

□

博昭「更科さん、諦めて俺のものになれっ」

博昭（心の声）「そしたら賭けに勝って五百円もらえるから」

博昭「いくぞっ」

□

突進する博昭。

博昭「見よ！ この日のためわざわざローマの拳闘奴隷養成所で鍛えた

コンビネーション！」

□  
ガカアッ！

ファイティングポーズでかがみ込む美晴の背景に稲妻。

美晴「させるかあっ！！」

「12+13」

□  
美晴（絶叫）「ギャラクティカ・マグナムッ！」

胸への右ストレート。背景は星の爆発。ふつとぶ博昭。

盗・作っ！（と、背景音）

「14」

□  
ズシャアアン！

天井に衝突し血を飛び散らす博昭。

□  
華村（汗）「ま、まさかそんな大技を使うとは……しかも盗作してまで」

□  
ズン！

美晴「強敵との戦いが私を強くしたのよ」

□  
浄雲「とも？ 華村か！ 華村なんだな！」

美晴「しまった他に適当な強敵がいなかった……」

「15」

□  
華村（白い目玉で）「強い…強いのだ」「だが二千年の歴史にはかなわないよ」

□ 華村「陸奥円明流・富嶽！」

頭に拳を載せて美晴の顎に頭突きする華村。吹っ飛ぶ美晴  
美晴「たわば！！」

「16」

□ 美晴、ボロボロの状態で立ち上る

ふらり…

美晴「やったわね……へへッつつぁんよ」

□ 美晴、いきなり地面に膝をつく。

美晴「…まいった。」

□ 驚く華村&浄雲。

美晴「これはドゲザ！」「日本ではこれは完全な降伏を意味するッ  
！」

「17」

□ ドゴォッ！

美晴「なんてやると思ったかぁ！！」

美晴、華村の至近距離に立ってボディブロー。

□ ゲエッ……

苦しそうな華村の口から童神が出てくる。

□ 浄雲（汗）「おいおい内輪ネタ度が上昇してきたぞ」

華村「もう手加減しないから！」

大量のチョコレートをほお張る華村。

□  
美晴「逃げない！」

魔法陣が現れ四方を半透明の壁が囲む。

「18+19」

背景は荒れる大海原での竜虎対決。

華村「ターキースパイクツ！」

両腕を広げ大空を舞う華村。

美晴「北斗百裂拳っ！ あたたたたたっ！」

「20」

□  
ゴン！ ジャリッ！

浄雲、釈杖と数珠で二人の頭を小突く。

浄雲「あんたらがやってもリアリティがない」

□  
浄雲「どうせならもつと現実にありえる女子格闘物からパクりなさい、

『綾音ちゃん▲イキツク』とか『竜の■晶』とか！」

美晴（コブができてる）「しかし、原作者のシュミ丸出しの展開だったわ……」

□  
華村「レフリーストップで引分…しかたがない、梁山泊の内弟子にでもなつて

鍛え直してくる。それからあらためて勝負しましょう。」

美晴（汗）「どうしても格闘技物にこだわるんですね」

「21」

□ 華村（背中向けて）「アスタ・ラ・ビスタ・ベイビー」

去って行く華村。

浄雲（汗）「でも美晴さんもよくあんな人と付き合ってられるんです」

□ 美晴（頭からタオルを被り拳を撫で、涙をひとしずく）「いいえ先生は……」

「ゲル化しようと思えばいつでもできた」「ただどあえてをしなかった」

□ 浄雲「……………」「そういえばなんでだろ？」

「22」

□ 美晴（さわやかな笑顔で）「だって……ボんユウ朋友でしょ？」

横書きキャプション「収集つかなかったので、ここで完」

欄外キャプション「次回『えろえろお化け先生』をお楽しみに！！

（注：この

予告はフィクションであり実際の作品等とは一切関係ありません

（汗））「

「終わり」

## 第六編「稻荷森（いなりもり）」（前書き）

### ■粗筋>

常川稻荷に今度は谷原の伯父がのりこんできた。伯父は美晴の意志を無視して勝手に土地の開発を始める。不安になった美晴に浄雲は……。

### ■主要人物>

美晴：更科美晴。冷たく無気力な感じの美少女。

ただしこのごろ情緒不安定。

浄雲：じょううん。旅の仏僧。20歳くらい？

谷原：谷原の伯父さん。泰造の兄（長兄？）。

作業員A：用心深い男。

作業員B：

作業員C：リーダー株？

猫：『神域穢』で死んだ猫。

おばあさん：浄雲に御布施する。

第六編「稻荷森（いなりもり）」

「1」

□

「1」

□

チリリン……

繁華街の一角に立つ旅姿の僧。（浄雲） 右手に鈴を付けた数珠で片手合掌、

左手には鉢。頭陀袋にはA4のコピーペーパーの束。

浄雲

「

舍利子

………  
色不異空 空不異色 色即是空 空即是色  
受想行識 亦復如是………」

通り過ぎて行く人々。

□

美晴、通りかかり浄雲に気がつく。

（美晴はスーパーマーケットの袋に大根・馬鈴薯・油揚げ・ゴボウなど煮物の材料を

詰め込んで下げてる…けれどこのコマはバストショットでも可

□

ちやりん

どこかのお婆さんが鉢に小銭を。

□

浄雲「おありがとうございます」

浄雲、合掌してるお婆さんにホチキス止したコピープリントのペーパーを渡す。

浄雲

「舍利子 是諸法空相

不生不滅 不垢不淨 不增不減 是故空中

無色 無受想行識

無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法……」

□ フキダシでつなぐ。

ちゃりーん

横から鉢に小銭を入れる美晴。

浄雲「おありが……」

「2」

T「稻荷森」

(3)

□ 浄雲（驚いて）「美晴さん……！？」

□ 美晴（無気力な表情で手を出して）「その紙……くれるんじゃないの？」

□ （場面転換）公園のベンチ。

美晴、「般若心経について」という題名の手書きレポートの「  
ピー」を読んでいる。

（前からの構図の場合は題名が見えなくても可です）

美晴の声

「『…わたくし、修行中の身ですが  
お志にわずかでも報いたく思い、  
不才ながら般若心経の解説を  
させていただきました。…』」

「『皆様の仏教へのご理解の一助となれば幸いです。が、若輩者ゆえ解釈に間違いなどあつたらぜひご指導をたまわり、なお一層の勉強を……』」

□ 呆れてプリントを見てる美晴。

美晴「修行のしすぎで頭がおかしくなったのかしら、あのひと？」

「いくら托鉢したってこんなペーパー配ってたら赤字だわ」

「あーあ 住所まで公開しちゃって……」

□ コピーを透かすように眺めながら溜息。

美晴「拝み屋さんでもやれば儲かるのに……ちから霊力はあるんだから」

「3」

□ コピーの紙面

紙面（手書き文字、誤字脱字はママ）

「「舍利子 是諸法空相（しゃりしぜ しょほつくうそつ）」

このくだりではお釈迦さまは、『舍利子よ、すべての存在は空（くう）というセイシツなのだよ』と言われています。先ほども申しましたが、この『空』というのは大乘仏教でとてもたいせつです。このあと、空についての説明がありますけれど、なかなか読むだけで理解できるものではありません。般若波羅密とは『空をただしく体感し理解する』というイミであり、そのために

六波羅密という修行が……」

美晴の声「だけど……ほんとヘタな文章。無駄な記述が多いし構成

も目茶苦茶だし字も

間違ってるし」「こんなんじゃきつと誰も解らないわ…一生懸命  
ってことは伝わるけど」

書文字「『性質』くらい漢字で書いてよ」

□

美晴「くそまじめで不器用な性格なのね……」

クスッ

□

ハッ

気がついて赤面。

□

美晴、仏頂面でコピーをしまいながら

美晴「違いわ 単に自己顕示欲が旺盛なのよ」「……下劣ね」

ゴソゴソ

「4」

□

スーパーの袋をさげ足早に立ち去って行く美晴。

美晴「ふう……時間を浪費しちゃった」

□ 藪から見ている猫。

□ (場面転換) 美晴の家。

□

コトコト…

お鍋が煮えている。

□

美晴、無表情のまま大根を手に

美晴「えっと…こっちはお供え用…と」

□

美晴、籠の中の野菜を見ながら

美晴「そつか……今月から月並祭（＊）は私一人でやるんだ……」

（欄外注：神社で毎月行われる小さな儀式）

「5」

□

稲荷祠の前。祠をじっと見てる美晴。

□

美晴は無表情。

□

キィー… バタツ

との物音に、美晴、ふと気がつく。

□

谷原、鳥居の方からやってくる。

谷原「やあ美晴ちゃん」

美晴の声「谷原の伯父さん…」

□（場面転換）居間。

お茶から湯気が出る。

美晴の声「ええ、中里の伯父さんは一度ここに来たんですけれど、その後のことは

知りません」

谷原の声「そつか…どうしちゃったんだろうな…家族ごと行方不明なんて」

「6」

□

美晴「警察には……」

谷原の声「届けたさ」

□ 谷原「だけど行方不明っただけじゃ捜査してくれないんだ。家出や蒸発までいちいち

捜してたらきりが無いからな」

□ 美晴「そうですね」

クス…

美晴「警察は事件だと判明<sup>わか</sup>ってからでないと動きませんから……」

□ 谷原「だけど美晴ちゃん、これからどうするんだい。神社を守るのはいいけれど相続税が大変だぞ」

□ 美晴「泰造伯父さんは……生前、私にアパートを一軒残してくれると」「家賃と管理費からなんとか税金を払って神社の管理をするようにって……」

「7」

□ 谷原（あわてて）「アパート……あれは駄目だ、学生的美晴ちゃんに管理しきれないよ」

□ 美晴「……………」

□ 谷原「とはいえ、神社だけじゃ土地の税金は払えない」「どうだねここは私に任せないか？  
悪いようにはしないよ」

□ 美晴「でも伯父さんの遺言では……」  
谷原「遺言書は私が預かってる」

□ 美晴「……え？」

□ 谷原「中里の伯父さんがね、泰造伯父さんが死ぬ直前に会った時に遺書をもたらったんだ。」

それを私が預かってる」

「8」

□ 美晴

「死ぬ直前で…意識はもうなかったはずですよ？」

谷原「死ぬ直前に意識が戻るなんてことはよくあるんだよ！」「そのときに遺言の変更が

あったんだ」

□ 谷原（ニヤリ）「伯父さんたちみんな君の面倒を見てくれ、アパートや神社の管理も

やってくれ ……ってね」

□ 美晴「そんな…ばかな？ 私が預かった遺書と話がちがいます……」

□ 谷原（コピーを渡しつつ）「それは古い遺書だから無効だ。新しいのには書いてあるよ。」

ほらこのコピーを見な」

□ 遺言書のコピーを見てる美晴。

美晴「件のアパートは谷原の伯父さんのものに……？」「……この文書は中里の伯父さんの

字ですね？」

谷原の声「代筆だ。泰造は意識は戻ったが字は書けなかったんだそ

うだ」

□ 谷原「ちゃんと公証人の署名もあるだろう。裁判所でも通用するんだよこの遺言書は」

美晴「……………」

「9」

□ 夕方の学校。

□ 屋上。

そよ風が、金網に寄りかかっている美晴の髪を梳く。手には浄雲からもらったペーパーが。

美晴（心の声）

「『無無明亦 無無明尽（む むみょう やく む むみょうじん）』」

迷いの実体など存在せず

また迷いがなくなるという

こともない、ということです。

つまり迷いがあると思っている

から迷いがあるわけです……………」

□

キイ…

扉を開き屋上に現れた華村。

華村「あら更科さん、こんなところに」

美晴、とつさにペーパーを隠す。

□

華村「あなたこんど転校するんですって？ 伯父さんが来て手続きしてたわ」「淋しくなる

わね」

と言いつつ少し嬉しそう。

□ 美晴「!!」「ばかな!」

□ タツ

屋上を駆け離れて行く美晴。

□ 華村、口元がニヤリ。

「11」

□ 常川稲荷。

ウイイイン…ガガガガ

すでに稲荷の森の伐採が始まっていた。作業員たちが木を切っている。

立ち尽くす美晴の後ろ姿。

□ ガガガガガツ……

看板「ハイツ蒙木台 建設予定地」「あぶないからはいってはいけません」

□ ウイイイン……

美晴（青くなつて呆然）「な……なんてことを」

「12」

□ 夜の土手と河原。

□ 折り畳みの机を起き、そこを簡単な祭壇にして持仏に読経している浄雲。

手には数珠。

浄雲

「……  
しゅんにちえんまんせいせいけつぱく  
純一圓滿清浄潔白

説一切法清淨句門  
所謂  
妙適清淨句是菩薩位  
欲箭清淨句是菩薩位  
觸清淨句是菩薩位  
愛縛清淨句是菩薩位  
一切自在主清淨句  
是菩薩位

土手に立つて、悲しげな顔で見ている  
美晴。

□  
浄雲

右手抽擲本初大金剛  
作勇進勢説大樂金剛

不空三摩耶心 《ふうこうさんまいやしん》

浄雲、美晴に気がつく。

「13」

□  
浄雲（数珠を持ったまま振り向いて）「美晴さん？」

□（時間経過）

河原のビニールシートに相對して正坐してる美晴と浄雲。  
小型のガスコンロがあり、キャンピング用のコフェルでお湯が  
沸かされている。

ペットボトルのミネラル水を使用。二人と道具はちょうど茶室  
のような配置。

（客・主・火の直角三角形）

□ 浄雲、缶から抹茶を匙で一つまみ分、

□ サッ

□ コフェルのお湯にとかし、スプーンでかき回す。

□ 浄雲、体を横のまま顔だけ向けて湯気の立つコフェルを差し出す。

浄雲「旅空の身ゆえ、こんなものしかありませんが」

「14」

□ 美晴、コフェルの茶湯を一口。

□ 美晴、コフェルを両手で持ち。湯気の香りを嗅ぎながら、

美晴「……あったかい」

□ 浄雲「冷たいものの方がよかったでしょうか。銭湯の帰りに買ってくるんだった……」

美晴「ううん いいよ。浄雲がいつも飲んでるもので」

□ 美晴（冷ややかに）「ところで浄雲……さっき詠んでたお経はペーパーのと違うのね」

□ 浄雲（少し嬉しい）「！ わかりますか？」「般若理趣経です」  
美晴「へえ そっちもペーパーちょうだい？」

「15」

□

浄雲、急に厳しい顔に。

浄雲「……ダメです、理趣經の解説は作りません」

□ 美晴（コフェルを持ったまま少し驚いて）「どうして？」

□ 浄雲「般若心経は、人間に対して仏の世界の真理を説いた經典ですが」「般若理趣經は、

仏陀の視点から人の世界の真理を説いた内容です」「仏を知らない人には、百害あって

一利なし。美晴さんにはだめです」

□ 美晴（飲みながら）「けちな」

浄雲（困った顔で）「日本史の教科書に出てるような高僧でも、このお経は借りられなかった

事例もあるくらい、大きな問題があるのですよ」

□ 浄雲（視線を落としながら）「たとえば……」

よくせん・せいせいく・し・ほさあい  
『欲箭清浄句是菩薩位 よくせん・せいせいく・し・ほさあい 觸清浄句是菩薩位』

飛んできた矢のように突然に起こる欲望は清浄であり菩薩の境地だ  
触れあうことは清浄であり菩薩の境地だ」

「こう聞いたら美晴さんはどう思いますか？」

□ 美晴（呆然＋赤）「どう……って」

（回想）

浄雲「私だって異性への煩惱が完全に無くなってるわけではあり  
ません」

「16」

□ 浄雲（さらに厳しい顔）「わかりにくいでしょうか。じゃあこれは？」

あいはいく・せいせいく・し・ほーさあい  
『愛縛清淨句是菩薩位 適悦清淨句是菩薩位』

縛るように強く抱きしめ合うことは清淨であり菩薩の境地だ  
愛液や精液の迸る悦びは清淨であり菩薩の境地だ……………」

美晴（汗）「ちよつと…ちよつとっ！」

□  
美晴（赤面をコフェルで隠しつつ目を逸らす）「女性に向かってな  
んてこと言うのよ…」

□  
浄雲（厳しい顔）「これは 言葉では説明できない『大樂金剛』と  
いう

悟りの境地をムリヤリ表現しようとした文章です」「しかし觀想  
修行を経てから学ばないと

たいてい誤解する…そう 美晴さんの想像した内容のように、ほ  
とんどの人が」

□  
浄雲「理趣経はあまりにも繊細すぎます。だから本当に必要として  
る人にしか

説いてはいけない。わかってください」「心経ならお話しします。  
理論的で難しいけれど、

その分、誤解は少なくて人生に必ず役立つ内容で……………」

美晴（空のコフェルを差し出し）「別にいいわ。お経を習いに来た  
わけじゃないもの」

□  
浄雲（コフェルにお茶を作りながら微笑）「…でも何か迷いがある  
のですよね？」「私で  
よければ話を聞きますよ」

「17」

□ （時間経過）

（回想）

言葉「裁判に持っていつても通用するんだよ」

（現実）

美晴（お茶を飲みながら）「弁護士費用を払えない私が国費の弁護士で裁判をしても

負けるだけ…」

□

美晴（下を向いて）「谷原の伯父さんに常川稲荷を維持する気はたぶんないわ。もちろん

霊力もない…」「結界が完全に無くなってお狐様もいなくなったら荒御霊を鎮める方法も

私にはもうない……」

□

浄雲（困り顔）「キツイですね」

□

美晴（もうコフェルは持っていない）「でも、だからって荒御霊を消してはだめなのよ！」

「悪いのは私たち人間なんだから。原罪を負ってるのは私たちなんだから…」

□

浄雲「原罪……？」「美晴さんは神徒<sup>シントイスト</sup>じゃありませんでしたか？」

「18」

□

言葉に詰まってる美晴。

浄雲（コフェルにお茶を作りつつ）

「『諸々《<sup>まがことつみけが</sup>もろもろ》の曲事罪穢<sup>みでぎ</sup>れを、被い給え清め給え』

…罪穢<sup>みでぎ</sup>れを、楔<sup>くわ</sup>して被<sup>か</sup>って清める。それが神道でしょう？」

□

美晴（視線を逸らし）「そうね。でも……」「人間で、清められな

いほど穢なすぎるわ。

清めるためにはもう死ぬしか……」

□ 浄雲（お茶をすすりつつ）

「『不生不滅ふしよふめつ 不垢不淨ふくふじよう  
不増不減ふぞつふげん 是故空中ぜこくちゆう』

……心経の一節ですが」

□ 美晴、驚愕し思い切り目を見開く。

（このカット、ものすごい超大おどろき（伏線））

□ 浄雲（コフェルを手ニコリ）「最初から生まれてるものではなく最初から滅びてるものもない。」

最初から汚れてるものもないし最初からきれいなものもない……

……」「人間だって

御霊だって同じじゃないでしょうか。」

「19」

□ 美晴、浄雲を凝視。

浄雲（コフェルでまた茶を飲みつつ）「もう少しだけがんばってみませんか」「私と美晴さん

ではやり方が違うけれど」「人間や御霊をこれ以上に苦しめたくないという気持ちは

いっしょです。その気持ちはきっと天に通じる」

□ 美晴「浄雲……」「そ…そうね…私も自分にできることをしてみればいいのかな」

□ 浄雲（ニコツ）「ふっきれたようですね。良い顔になりました」

□

美晴、立ち上る。

浄雲、コフェルにお湯を入れながら

浄雲「そろそろ帰られますか」

美晴（立ち上りながら）「うん……あ、浄雲それとね……あのね。私、ひとつだけ言いたいことがあるんだけど」

□

美晴（ふりむき赤面しつつ仏頂面）「……………さりげなく関節キスしてんじゃないわよ」

「下劣ね。」

書文字（小）「前ページ3コマめ」

□

ぶっ！

浄雲、焦ってお茶を吹き出す。

「20」

□

ごまかすように慌てて去る美晴

美晴「おやすみなさい」

周囲をびしゃびしゃにしてしまった浄雲。布巾で慌てて拭き取りながら

浄雲「お、おやすみなさい……」

□

四つんばいで「反省」状態の浄雲。

浄雲（心の声）「……言われるまで気がつかなかった（汗）」「でも客と主が同じ器で抹茶を

喫するのは、古式の作法ですよ……（涙）」

□

チャプ……

川の水の中から見ている目玉。

「21」

□

翌日、森の消えた常川稲荷。大岩があり、ロープがかけられ動かす準備がされてる。

ウィーン ガガガガガ

ドリルやショベルカーの音。

美晴（冷ややかに見つめながら）「せめて、月並祭が終わるまで祠は動かさないで下さい」

□

谷川「わがままを言うんじゃない、工事はもう始まってるんだ」

美晴「わがままじゃありません。毎月14日に月並祭をしないとお狐様は……」

谷川「うるさい！」

□

谷川「祠はマンションの屋上に移してやるそれで満足しろ」「お前はもうこの土地には

あれこれ言う権利はないんだよ！」

□

美晴「？」「……どういことですか？」

□

谷川「お前は地主だが、マンションを経営するのは俺だ！ オマエは名前だけなんだよ！」

「そしていまの法律では合法的にやってる限り貸主より借りた者の方が権利が強いんだ！

よく憶えとけ！」

□

驚く美晴。背景は落雷。（心理描写）

□ 作業員Aの声「おおーい！ 岩をどけたら変なものが出て来たぞ！」

「22」

□ 祠の後ろ。

作業員B「なんだ？」

作業員A「犬かなんかの骨だ」  
パワーストーンヨベルから  
作業員C「関係ねえ、捨てちまえ」

□ 横たわってる狐の骨。岩の下が巣穴の跡だった様子。  
入口近辺にはなんとなく儀式的跡のような。

作業員の声「だけど……あの岩、もしかして墓石だったんじゃないのか？」  
「隅に壺とか  
香炉とか埋まってるし、かなり古そうな……」

□ 谷川「やかましい！ 下手に遺跡なんか出てきたら工事が遅れるだろう！」  
「とつとと壊して

捨てる！ 祠も早く動かせ！」

谷川をひややかに見てる美晴。

□ ハッ！

突然気がつく美晴。

（回想）

猫「神社の裏に森があるだろ。狐の巣穴の跡があるんだそこに狐の霊が……」

「23」

□

美晴「伯父さん！」「だめ……！！」

□ ガッ……

狐の骨のところにパワーシヨベルが打ち込まれる。

□ カッ！

シヨベルが打ち込まれたところから閃光が。

「24」

□ ケエー……ン

狐のような形の白い光が何匹も常川稲荷から天に昇って行く。  
稲荷祠の真後ろに蒙木台高校が見えてる。

□ 驚いて空を見ている美晴。

「25」

□ パワーシヨベルの運転席。

作業員A「なんだ？」

作業員B「どうしたんです？」

作業員C「一瞬、寒気がしたんだけど……風邪かなあ？」

□ 谷山「ほら 美晴！ オマエはとっとと引越しのしたくでもはじめろ！」「あのボロ家も

今週中に取り壊すからな」「俺んちでオマエを引き取ってやるんだぞありがたく思え！」

□ 無表情で空を見てる美晴。

ゴロゴロゴロ…

にわかに曇り出す空。遠くに雷の音。

ポツ…ポツ…

雨が降り出す。

「26」

ザアッ

作業員A「うわ！」

いきなり豪雨となる。

ビシャッ！ゴロゴロゴロゴロ……

作業員たち「タ立か！？」「明日じゃなかったのか、雷雨は！？」

「いそいで片づけろ」

右往左往する作業員たち。

ザアアアッ

ビシヨ濡れになりながら空を見て続けてる美晴。

ビカツ

空に雷がうずまく。

「27」

ガシヤアアアン！パワーシヨベルに落雷。

谷山「うわあああつ！？」

作業員C「ぎゃあああつ！」

感電する作業員Cと谷山。

ゴロゴロゴロ……

作業員達の声「雷が落ちたぞ!」「救急車! 救急車だ!」

ビシヨ濡れの美晴。

美晴(つぶやき)「お狐様の……荒御霊!？」

□

美晴(呆然)「贅……」「……霊のいない祠って、つまり、拝殿よね!？」「じゃあお狐様って

……!」

「28」

□

ピカツ!!

さらに落雷。

□

ドザアアア……アアア……

土砂降りの中、強く拳を握り締め空に向かって叫ぶ美晴。

美晴「風は天空の息吹あめ いぶき! 雨は大地の楔つち みそぎ!

稲妻は天地の交合あめつち まくわい!」

「この罪穢れたる領域くを罪穢れ下劣なる吾等われの身を! 抜いたまえ!

清めたまえ! 祓戸の大神たちよ!」

ピシャアツ!!

□

ガラガラガラガラ……

ケエー……ン

白い光が雷雲の中を飛んで行く。

<つづく!>

## 第六編「稻荷森（いなりもり）」（後書き）

お坊さんが般若心経の解説コピーを配ることにリアリティがないという批評がありました。これは新宿駅西口で見た実話で、ペーパーには住所も書かれていました。

次回で最終話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9415x/>

---

霊能少女 更科美晴シリーズ

2011年11月27日18時53分発行